Passerelle Report

厚生労働省 令和３年度障害者芸術文化活動普及支援事業

中国・四国ブロック 障害者芸術文化活動広域支援センター

『中国・四国 Artbrut Support Center passerelle』

令和３年度事業報告書

もくじ

3　はじめに

中国・四国ブロックの各支援センターの取り組み

4　鳥取県　あいサポート・アートセンター
6　島根県　島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
8　広島県　広島県アートサポートセンター
10　徳島県　徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター
12　香川県　香川みんなのアート活動センターKAGAWAMOVES
13　愛媛県　愛媛県障がい者アートサポートセンター
14　高知県　藁工ミュージアム　分室

事例紹介

18　事例紹介［香川県、広島県、鳥取県］
21　現場を巡る対談　香川×広島×鳥取

28　事例紹介［高知県、徳島県、島根県］
31　現場を巡る対談　高知×徳島×島根

40　事例紹介［愛媛県］
41　現場を巡る対談　愛媛

44　ビデオ・プリゼント ～「イマココ」を発信できる、ビデオ技術を届けます～

はじめに

このたび、中国・四国Artbrut Support Center passerelle（パスレル）として2回目のPasserelle Reportを発行することができました。2年目のパスレルはコロナ禍により活動が大きく制限され、精力的に行動できなかったように思います。そのような中でも各支援センターの皆さんは、相談業務や企画展の準備など様々な活動に尽力されてきました。

今回の報告書では、日々の活動の中からかかわりのあった1事例を各支援センターから事例報告として提出していただきました。そして、その事例をもとに座談会を開催しました。

このような事例報告と座談会を企画した理由は、障害者の芸術文化活動普及支援事業というものの目的を再考したことがきっかけでした。障害者の芸術文化活動普及支援事業は言葉の通り、障害者の芸術文化活動を普及支援していく事業であると認識しています。したがって、本事業を実施することで、障害当事者、もしくはそのご家族、支援者等になんらかの影響を与えることが必要であると考えております。

また、それらの事例の集積は広域センターとしての責務であると強く思っています。そのため、今年度のPasserelle Reportでは事例を踏まえた座談会を各支援センターと実施し、記録として残していくことを目玉企画としました。障害者の芸術文化活動普及支援事業のリアルがそこにあると思います。本書が障害者の芸術文化活動普及支援の一助になれば幸いです。

中国・四国Artbrut Support Center passerelle
センター長
岡村 忠弘

鳥取

支援センター名／あいサポート・アートセンター

企画展

れもん徳島アートスタジオ作品展
カモン！イエス！レモン！

[本展]2021.4.17（土）～6.13（日）
会場：くらよしアートミュージアム無心
[巡回展]6.16（水）～6.24（木）
会場：とりぎん文化会館　展示室
れもん徳島アートスタジオに在籍するアーティスト6名の絵画やガラス、ワイヤーを使用した作品の展示やグッズを販売。
協力：社会福祉法人カリヨンれもん徳島アートスタジオ

特定非営利活動法人 十人十色作品展
再生可能だ！アートの奇跡！！～SDGs 捨てられる物たちに命を吹き込んで～

2021.7.10（土）～8.9（月・振替休日）
会場：くらよしアートミュージアム無心
鳥取県はーとふるアートギャラリーに認定されることに併せて作品展を開催。廃材などの捨てられる物を使って制作した作品を展示。
協力：特定非営利活動法人十人十色

鳥取県立倉吉養護学校作品展
宇宙の惑星のように輝け

2021.10.23（土）～11.14（日）
会場：くらよしアートミュージアム無心
鳥取県立倉吉養護学校の小学部から高等部までの児童・生徒が、授業や日頃の活動の中で制作した作品を展示。
共催：鳥取県立倉吉養護学校

鳥取県はーとふるアートギャラリー合同作品展
はーとをふるわせて

[西部会場]2021.10.15（金）～10.17（日）
会場：米子コンベンションセンターBiGSHiP　1階情報プラザ
[東部会場①]10.30（土）～11.14（日）
会場：ギャラリーからふる
[東部会場②]11.3（水・祝）～11.14（日）
会場：ギャラリー鳥たちのいえ
[中部会場]12.11（土）～2022.1.16（日）
会場：くらよしアートミュージアム無心
鳥取県はーとふるアートギャラリーに認定されている4つのギャラリー※とそこで活躍する作者達を紹介する作品展。（※2021年10月現在）
協力：一般社団法人アートスペースからふる（認定第1号ギャラリーからふる運営）、社会福祉法人もみの木福祉会（認定第2号もみの木アートギャラリー運営）、特定非営利活動法人あかり広場（認定第3号あかりアートギャラリー運営）、特定非営利活動法人十人十色（認定第4号ごっつ ええがなぁ アートギャラリー運営）

令和3年度島根県障がい者アート作品展
－WEB展2021－「受賞作品展」（延期）

[本展]2022.2.19（土）～3.6（日）
会場：くらよしアートミュージアム無心
[巡回展]3.11（金）～3.15（火）
会場：米子市美術館
島根県との連携企画として「令和3年度島根県障がい者アート作品展－WEB展2021－」の受賞作品を鳥取県で紹介する作品展。
※展示予定だった受賞作品は「アートベースしまねいろ」の公式サイトから閲覧可。
共催：島根県障がい者文化芸術活動支援センター　アートベースしまねいろ

▲上から順に企画展「特定非営利活動法人 十人十色作品展」、企画展「鳥取県立倉吉養護学校作品展」、企画展「れもん徳島アートスタジオ作品展」（巡回展）

▲企画展「鳥取県はーとふるアートギャラリー合同作品展」（西部会場）

▲「もう一人の自分」
作：有里

▲福祉を変えるアート化セミナー「異彩を、放て。」の様子

その他

Iknow才能展vol.03

2021.11.23（火）～11.29（月）
会場：くらよしアートミュージアム無心
鳥取県独自の補助金制度「令和3年度あいサポート・アートセンター障がい者アート活動支援事業補助金」を活用した作品展。
主催：いちごプロ。

鳥取県立倉吉養護学校ワークショップ
「プロから学ぼう」

[第1回]2021.7.13（火）
会場：鳥取県立倉吉養護学校
[第2回]2021.10.1（金）　リモート開催
学校祭での演劇発表を目標に、表現力の向上を目指した学習として、中学部の生徒が身体表現などを「鳥の劇場」のプロの役者から学ぶワークショップ。
連携機関：特定非営利活動法人 鳥の劇場

鳥取県はーとふるアートギャラリー合同作品展
関連トークイベント「ゆるり～と～く」

2021.11.3（水・祝）
会場：パレットとっとり市民交流ホール
はーとふるアートギャラリーや障がい者アートについて、認定ギャラリーの方々と一般参加者の方々が自由に語り合える“ゆる～いトークイベント”。
協力：一般社団法人アートスペースからふる（認定第1号ギャラリーからふる運営）、社会福祉法人もみの木福祉会（認定第2号もみの木アートギャラリー運営）、特定非営利活動法人あかり広場（認定第3号あかりアートギャラリー運営）

フクシ×アートWEBフォーラム
福祉を変えるアート化セミナー
「異彩を、放て。」

2021.11.14（日）　YouTubeライブ無料配信
[パブリックビューイング会場]ギャラリーからふる
福祉実験ユニット「ヘラルボニー」の副代表・松田文登氏の講演と、「一般社団法人アートスペースからふる」（鳥取市）の理事長・妹尾恵依子氏との対談をWEB配信。
講師・パネリスト：松田文登氏（株式会社ヘラルボニー）
コーディネーター：山下弥生氏（FM鳥取）
企画・運営：一般社団法人アートスペースからふる

▶トークイベント
「ゆるり～と～く」の様子

島根

支援センター名／島根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねいろ

▲島根県障がい者アート作品展2020巡回展

展覧会

江津市障がい児・者アート作品展
2021.4.28（水）～6.21（月）
会場：江津市総合市民センター
江津市内の通所事業所等に所属する利用者さんが描いたアート作品の展示。
連携機関等：江津市教育委員会

島根県障がい者アート作品展2020巡回展 inグラントワ
2021.11.5（金）～11.7（日）
会場：島根県芸術文化センター「グラントワ」多目的ギャラリー
令和2年度島根県障がい者アート作品展の受賞作品と島根県のアールブリュット作家作品の巡回展示。
連携機関等：島根県/出雲サンホーム

島根県総合美術展における障がい者アート作品の展示
2021.11.22（月）～11.27（土）
会場：島根県民会館
島根県総合美術展の会場における、島根県障がい者アート作品の展示。
連携機関等：島根県

令和3年度島根県障がい者アート作品展 WEB展2021
2021.12.1（水）～12.31（金）
会場：アートベースしまねいろ公式ホームページ
令和3年度 島根県障がい者アート作品展をWEB上の展覧会として開催。
連携機関等：島根県/（社福）島根県社会福祉協議会/島根県知的障害者福祉協会/（公財）しまね文化振興財団/島根県障害者社会参加推進センター

その他

にぎやかな日々
2021.5.23（日）
会場：江津市総合市民センター
障がい当事者自らが指揮者体験や楽器演奏が体験できる参加型の音楽会と、≪福祉×芸術≫の団体らによる音楽や石見神楽上演。
連携機関等：文化庁/島根県/（公財）しまね文化振興財団（いわみ芸術劇場）/ヒビノデザイン/atelier103

島根県立図書館タイアップ事業
2021.9.3（金）～10.6（水）
会場：島根県立図書館
島根県立図書館のロビーにて、アートベースしまねいろの活動紹介や障がい者アートに関連する書籍の展示。
連携機関等：島根県立図書館/島根県

表現するよろこび
2021.10.3（日）
会場：島根県立図書館集会室
講師・坂本文江氏による自然や障がい者の文化芸術活動に関するテーマトークの実施。
協力：島根県立図書館/島根県

▲▲テーマトーク「表現するよろこび」
▲音楽祭「にぎやかな日々」会場入口

▼音楽祭「にぎやかな日々」会場内の様子

広島

支援センター名／広島県アートサポートセンター

ワークショップ

身体表現セミナー＆ワークショップ
「ほぐすつながる表現あそび」
1回目2021.11.20（土）
会場：広島市安芸区民文化センター
2回目2021.12.11（土）
会場：有限会社木利画材
1回目人が身体表現をする意義や効果について学ぶ。
2回目身体を動かすことで、自分の身体と心が変化していくことを体験する。
講師：玖島雅子氏（ARTCOMPLEXHIROSHIMA代表）

演劇セミナー＆ワークショップ
「演劇×福祉でできることみえること」
2022.3.17（木）～18（金）
会場：広島市東区民文化センター音楽室
1回目セミナー「演劇を取り入れた事業成果の発表と課題点の共有」
2回目ワークショップ「問題・課題を演じてみよう」
講師：岩﨑きえ氏/坂田光平氏（一般社団法人舞台芸術制作室無色透明代表）

▲身体表現セミナー＆ワークショップ「ほぐすつながる表現あそび」の様子

▼演劇セミナー＆ワークショップ「演劇×福祉でできることみえること」の様子

セミナー

ここだけは押さえておこう　作品撮影の基本のき
2021.7.31（土）
会場：広島市安佐南区民文化センター
表現活動をサポートする力のスキル向上のため、応募に適した作品撮影の基本を学ぶ。
講師：西田英俊氏（カメラマン）

ここだけは押さえておこう　紙、水彩絵具の基本のき
2021.8.7（土）
会場：有限会社木利画材
創作活動に必要な知識向上のため、紙、絵の具など、画材の種類や特徴について学ぶとともに現場で画材をうまく活かしていくコツを知る。
講師：細川泉氏（元支援学校教諭）、片山修氏（画材展スタッフ）

アートとフクシのコラボーケン～ときどきキョーイク
2021.11.27（土）
オンライン開催
県外の表現活動の取り組みや様子を知り、今後の活動のヒントを得る。
講師：米田昌功氏（画家、アートNPO障害者アート支援工房ココペリ(COCOPELLI)代表）

障がいのある方の意思決定支援を考える
～あなたの「やりたい」を真ん中に～
2022.1.22（土）
会場：広島市総合福祉センターホールB→オンライン開催
「意思決定支援とは何か?」を大分県にある「かたつむり学舎」の事例や具体的手法を通して、参加者みんなで意思決定支援について考え、誰でも意思を持っており、尊重することの大切さを確認する。
講師：福崎はる氏（かたつむり学舎代表）

座談会

おしゃべり座談会3回
2021.9.24（金）、12.23（木）、2022.3中旬に予定
オンライン開催
障がいのある人の表現活動をサポートしている支援者、サポーターが集まり、日々の活動や悩み事について共有し、共に考え、支援者、サポーターが楽しんで表現活動のサポートに取り組める環境を整える。
連携機関等：参加を希望された障害者福祉施設・サービス事業所のスタッフ、ワークショップなどを主催されている講師など

▲みんなで楽しむおしゃべり鑑賞会~君の見方で絵をみよう~の様子

▲「ここだけは押さえておこう紙、水彩絵具の基本のき」の様子

その他

みんなで楽しむおしゃべり鑑賞会
~君の見方で絵をみよう~
2021.10.16(土)
オンライン開催
広島県立美術館所蔵作品1点について、見て感じたり考えたことを参加者みんなで話し、他者と対話することで多様な鑑賞方法がある事などを知り、鑑賞の楽しさを感じる。
連携機関：広島県/広島大学/広島県立美術館/広島県アートサポートセンター

オンラインギャラリー　1枚の絵をきっかけに
~はじまることば・はじまる写真~
作品募集期間：2021.10.16(土)~12.17(金)
公開期間：2022.2.3（木）～3.31（木）
オンライン開催
広島県立美術館所蔵作品1点をお題に、そこから考えたこと、想像したことを物語や詩、タイトル、漢字の組み合わせなど、様々なことばで表現することば部門と、作品と同じようなポージングなどをして撮影する写真部門で作品を公募。応募された作品は広島県アートサポートセンターのホームページにて公開。
連携機関：広島県/広島大学/広島県立美術館/広島県アートサポートセンター

アートの巣箱
2021.9~2022.3.31
会場：はつかいち宮島情報センター/社会福祉法人友和の里/トヨペット廿日市店ナレッジルーム/有限会社木利画材
表現活動の裾野を広げることを目的に、障がいのある方の表現活動に取り組む団体を対象に助成金公募を募り、3団体に交付。
連携機関：art201/ARTCOMPLEXHIROSHIMA/一般社団法人舞台芸術制作室無色透明

画材支援プログラム
2022.2.3（木）～3.31（木）
コロナ禍にあっても、表現活動のインフラ整備につながると考え、希望する障害者施設・サービス事業所に画材提供する。
連携機関：広島県内にある障害者施設・サービス事業所およそ100箇所

徳島

支援センター名／徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

▲PICFAアートの仕事展

▲Tシャツデザイン展

▲第7回「障がい者アーティストの卵」発掘展

▲第7回「障がい者アーティストの卵」発掘展受賞作品展

展覧会

全国公募 夏の空をTシャツで彩ろう
「 Tシャツデザイン展」
2021.8.13（金）～9.29（水）
会場：徳島県立障がい者交流プラザ 2階プラザギャラリー
【巡回展】2021.10.12（火）～24（日）
徳島県立総合福祉センター
全国からの応募数425点。優秀賞5点、佳作10点を選出。優秀賞のデザインは実際のTシャツにプリントして受賞者に贈呈。

第7回「障がい者アーティストの卵」発掘展
2021.9.1（水）～5（日）
Web会場　公開中
会場：徳島県立近代美術館 1階ギャラリー
Web会場：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センターホームページで公開中
応募数125点。金賞・銀賞・銅賞・審査委員特別賞を選出

第7回「障がい者アーティストの卵」
発掘展受賞作品展
2021.10.9（土）～2022.1.10（月・祝）
会場：徳島県立障がい者交流プラザ1階プラザギャラリー
第7回「障がい者アーティストの卵」発掘展の受賞作品7点を展示。および全作品紹介映像を上映

PICFAアートの仕事展
2022.2.10（木）～27（日）
会場：徳島県立近代美術館 2階展示室
「医療法人清明会障害福祉サービス事業所PICFA」（佐賀県基山町）の作品、約100点を展示。

ワークショップ

コーヒーカップ絵付けワークショップ
2021.10.27（水）
会場：ふらっとKOKUFU 2階パブリックホール
ふらっとカフェで使用するカップ&ソーサーに絵付け、大谷焼元山窯とのコラボ作品。
講師：大谷焼元山窯十代目 田村栄一郎氏

障がい者アート活動支援のためのワークショップ
「視察研修」
2021.11.10（水）
会場：Good job センター香芝（奈良県）
参加者14名。奈良県のGood job センター香芝様の施設を訪問し見学。

障がい者アート活動支援のためのワークショップ
「ボディランゲージ遊学のススメ」
2021.11.12（金）
オンライン開催
4つの福祉施設とオンラインで実施。言葉や手話を使わなくても相手との関係を深められる、自分自身の身体だけで気持ちを伝えるコミュニケーションについて体験。
講師：演出家、舞台俳優の庄﨑隆志氏

障がい者アート活動支援のためのワークショップ
「身近な材料で楽しむ染色」
2021.11.20（土）・24（水）
会場：徳島県立近代美術館　アトリエ
水彩絵の具と豆乳を使った型染を体験。
講師：美術館係長 亀井幸子氏

障がい者アート活動支援のためのワークショップ
「美術館を体験しよう！ユニバーサル美術館展見学」
2021.12.25（土）
会場：徳島県立近代美術館 2階展示室
徳島県立近代美術館で開催中の「ユニバーサル美術館展」の会場で、誰もが楽しめる鑑賞の方法や、安心して観覧できるミュージアムを目指した取り組みなどを、担当学芸員と一緒に体験しながら考える。
講師：美術館上席学芸員 竹内利夫氏

▲Good job センター香芝見学

▲ボディランゲージ遊学のススメ

▲東京2020パラリンピック 聖火フェスティバル「出立式」

その他

音楽講座「音のシャワー」
12月～3月
会場：児童発達支援・放課後等デイサービス 児童デイフラット未来
ピアノ演奏に合わせた「リズム遊び」「歌」「ボディーパーカッション」「スカーフ遊び」など。

アンケート調査
「コロナ禍における芸術文化活動について」
5月～6月
352か所（県内福祉事業所・特別支援学校）にアンケートを配布。回答103か所　回答率29.2%

訪問調査
5月～7月
25の施設・特別支援学校を訪問し、芸術活動の現状等について調査

東京2020パラリンピック 聖火フェスティバル「出立式」
練習：5月～8月　本番：2021.8.14（土）
会場：徳島県教育会館　大ホール
東京2020パラリンピック聖火フェスティバル「出立式」に出演。徳島県立国府支援学校和太鼓部と徳島文理大学和太鼓部「億」による和太鼓の演奏と、さくら連による阿波踊りの練習を行い、本番の演奏・演技はテレビ放送された。

企画委員会の開催
第1回:2021.9（書面開催）　第2回:2022.3（書面開催）
会場：徳島県立障がい者交流プラザ 3階研修室

ホームページ・SNSなどによる情報発信
主催の行事や募集内容について、また県内外のイベント情報をホームページやinstagramで発信している。

相談記録簿の作成
創作活動についてや、情報提供、発表などに関する相談を随時受付。

プラザギャラリー貸出業務
会場：徳島県立障がい者交流プラザ プラザギャラリー
プラザギャラリーの貸出展示

香川

支援センター名／香川みんなのアート活動センター KAGAWAMOVES

▲みんなの《あまり》知らない世界

展覧会

巡回展
「香川県障害者芸術祭2019受賞者作品展」
2021.8.16(月)～8.27(金)
会場：香川県庁本館1階ロビー
出展事業所：善通寺希望の家／ウインドヒル／かすがの里

文化芸術作品の鑑賞会in香川県立ミュージアム
2021.12.16(木)
会場：香川県立ミュージアム
参加施設：地域活動支援センターわかたけ
案内人：高木専門職員（香川県立ミュージアム）

巡回展「みんなの《あまり》知らない世界」
2022.3.15(火)～4.10(日)
会場：香川県立図書館 閲覧室展示スペース
連携機関：アルプス香川
出展事業所：ミルキーウェイ／みくに成人寮／あゆみ園

▲香川県障害者芸術祭2019受賞者作品展

▲文化芸術作品の鑑賞会

愛媛

支援センター名／愛媛県障がい者アートサポートセンター

▲障がい者アートデザインコンペ

展覧会

障がい者芸術文化祭
～愛顔ひろがる えひめの障がい者アート展
2021.12.2（木）～12（日）
会場：愛媛県美術館 他
［入賞作品巡回展］伊予市役所：2021.12.17（金）～24（金）／八幡浜市立美術館：2022.1.12（水）～19（木）／テクスポート今治（今治市）：2022.2.5（土）～16（水）／愛媛県身体障がい者福祉センター（松山市）：2.18（金）～3.7（月）
募集内容:平面作品:（絵画（油彩、水彩、貼り絵、版画、デザインなど）、書（毛筆））、立体作品:陶芸、その他彫刻、工芸、手芸など。
講師：西田英俊氏（カメラマン）

その他

商品化支援事業
障がい者アートデザインコンペ
事前説明会：2021.6.8（火）／ワークショップ：6.14（月）／プレゼンテーション：7.5（月）／表彰式、知事報告会：10.22（金）
会場：愛媛県身体障がい者福祉センター他
障がい者とデザイナーがチームを組み、企業の課題に対し、ワークショップでアイデアを創出。各企業に採用されたデザインは各企業により製造・販売されている。
【協賛企業】タオル部門：タオル工業組合/大磯タオル（株）、コンテックス（株）、（株）ハートウエル　クッキー部門：（侑）ラポール

▲障がい者アートデザインコンペで誕生した賞品

その他

障がい者芸術文化祭～こころ集まれ2021～
2021.10.9（土）（中止）
会場：松山大街道商店街
ステージ発表、作品展示（アートギャラリー）、ライブアートパフォーマンス、アート体験（アートチャレンジ）、商品販売
・ステージ発表動画をYouTube配信

芸術文化活動を支援する人材の育成
①2021.11.9（火）中津川浩章氏講演会「障がい者アートの可能性」
会場：愛媛県身体障がい者福祉センター
②11.27（土）28（日） 作品展示研修
会場：愛媛県美術館

指導者の派遣
2021年9月～2022年2月
会場：各事業所、愛媛県身体障がい者福祉センター
舞台分野:2事業所、美術分野:2事業所、個人（4名）

▲ステージ発表動画の撮影

▲障がい者芸術文化祭の審査風景

高知

支援センター名／藁工ミュージアム　分室

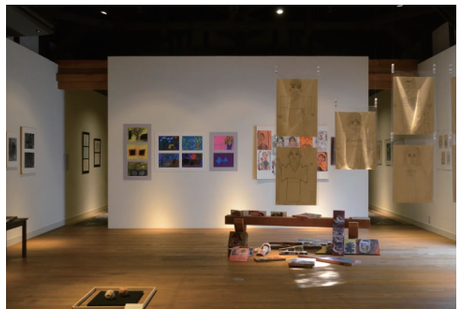
展覧会

WARAKOH think & feel vol.4 10年目の今考える
2021.3.1（月）～5.9（日）
会場：藁工ミュージアム
東日本大震災に改めてもう一度向き合う展覧会。
協力：作業所ら・ら・ら／大キイキ
［関連企画トークカフェ「西村知巳さん、大木裕之さんと話をしよう！」］2021.5.8（土）
会場：藁工ミュージアム展示室　トークゲスト：西村知己／大木裕之

あなたの星の王子さま
［展覧会］2021.8.11（水）～10.31（日）
会場：藁工ミュージアム
演劇公演に連動する展覧会。全国から公募した作品展示の他、事前に行った2つのワークショップの作品も展示。
連携機関等：土佐病院/高知みらい科学館/宇田味噌製造所/もりたうつわ製作所/高松ワークショップLab./織田信生/城下美穂
［ワークショップ あなたの『星の王子さま』を描こう］6.14（月）
会場：土佐病院デイケア
連携機関等：土佐病院デイケア 参加者：土佐病院デイケア利用者
読み聞かせ講師：城下美穂 絵画講師：織田信生
［星の王子さま　おはなし会］10.9（土）
会場：藁工ミュージアム
連携機関等：お城下（まち）ベース 講師：おはなし屋 しろちゃん（城下美穂）
［対談「大切なものは目に見えない」］10.23（土）～配信
連携機関等：宇田味噌製造所　トーカー：宇田卓生（宇田味噌製造所四代目）／島崎桃代（藁工ミュージアム学芸スタッフ）

第1回藁工アンパン　アートバザール
［売る人］2021.11.19（金）～25（木）
［観る人］11.19（金）～12.2（木）
［買う人］11.26（金）～12.2（木）
会場：藁工ミュージアム
「アートだ！」と思う作品なら、誰でも販売することができるアンデパンダン展。
［交流会］11.20（土）
会場：蛸蔵
［音楽ワークショップ］11.21（日）
会場：蛸蔵
講師：HumanBeatBoxer　KE☆N（ケン）
連携機関等：アートセンター画楽／NPO蛸蔵

カレンダーと展覧会
こころに平和を実行委員会の活動　1997-2012
［展覧会］2022.1.5（水）～1.23（日）
会場：藁工ミュージアム
精神障害者の病気や障害への理解を図り、彼らの美術活動を支援する活動を続け表現活動の可能性を開いてきた「こころに平和を実行委員会」の活動を紹介する展覧会。
連携機関等：こころに平和を実行委員会／高知県立精神保健福祉センター
［ワークショップ　スチレン版画でカレンダー］1.16（日）
会場：藁工ミュージアム
講師：織田信生



◀「カレンダーと展覧会 こころに平和を実行委員会の活動　1997-2012」展示風景

▲展覧会「なんでそんなんエキスポ2022」展示風景

▲展覧会「あなたの星の王子さま」展示風景

▲「第1回藁工アンパン アートバザール」音楽ワークショップの様子

展覧会

なんでそんなんエキスポ 2022　高知巡回展
理解しがたい、
けど気になるそんなものたちの博覧会 Vol.2
2022.2.27（日）～3.13（日）
会場：藁工ミュージアム
人の行為から生まれる「よくわからないこと」に対して真摯に向き合い、「なんでやねん」とツッコミを入れてできるだけポジティブに面白く楽しむための方法を探る「なんでそんなんプロジェクト」を紹介する展覧会。
連携機関等：なんでそんなんプロジェクト実行委員会／放課後等デイサービス ホハル／生活介護事業所 ぬか つくるとこ／株式会社 ぬか／パスレル　中国・四国 Artbrut Support Center／一般財団法人こうち文化福祉振興財団助成事業
［オープニングイベント］2.27（日）
会場：藁工ミュージアム
出演者：中ムラサトコ
［パビリオンガイド「カッター机の謎に迫る」］3.5（土）
会場：藁工ミュージアム
連携機関等：NPO法人 脳損傷友の会高知 青い空
ガイド：滝沢達志/辻野正三
［なんでそんなんトーク 大木さんと「なんでそんなん」を語る］3.12（土）
会場：藁工ミュージアム
連携機関等：NPO蛸蔵／ヨシダワークス　スピーカー：大木裕之／滝沢達史／中野厚志　進行：松本志帆子
［なんでそんなんトーク　マイケルの傾斜角］3.13（日）
会場：藁工ミュージアム
連携機関等：NPO蛸蔵／ヨシダワークス
スピーカー：大野雅孝／滝沢達史／中野厚志

イベント

高知 蔦屋書店×藁工ミュージアム×地域文化計画
トークイベント「『星の王子さま』ってどんなお話？」
2021.7.22（木・祝）
会場：高知 蔦屋書店 2階イベントスペース
「星の王子さま」のストーリーを知るとともに、「星の王子さま」にまつわる話や隠された秘密などを知るトークイベント
連携機関等：高知 蔦屋書店／特定非営利活動法人地域文化計画
講師：安藤麻貴（高知大学・高知県立大学非常勤講師）

A→Z（アートゾーン）で考えるトークイベント
「世界をちょっと広げてみる」
2021.12.10（金）
会場：藁工ミュージアム
いろいろな意見に耳を傾け対話を重ね、それぞれの違いをおもしろがることのできる社会をつくるためのトークイベント。今回は「小山田圭吾氏のいじめ問題」や「どう死ぬか」をテーマに開催。
ゲスト：木ノ戸昌行（NPO法人スウィングリジチョー）／吉田剛治（ヨシダワークス／NPO蛸蔵理事）

映画「地蔵とリビドー」上映会＋トークイベント
2022.3.5（土）　会場：高知市立自由民権記念館民権ホール
3.6（日）　会場：須崎市民文化会館大会議室B
障害者施設「やまなみ工房」（滋賀県）で作品がつくられるその日常を紹介するドキュメンタリー映画の上映会と、映画監督と「やまなみ工房」施設長を招いてのトークイベント。
連携機関等：須崎市／特定非営利活動法人　暮らすさき／すさきまちかどギャラリー／やまなみ工房／PR-y／株式会社リッシ／シネマ四国／高知市立自由民権記念館／須崎市立須崎市民文化会館　※須崎市社会参加支援事業

▲『なんでそんなんトーク 大木さんと「なんでそんなん」を語る』の様子

▲映画「地蔵とリビドー」上映会＋トークイベントの様子

演劇公演等

演劇公演「祝祭　音楽劇　小さな星の王子さま」いろいろいろを楽しむ演劇Project2021

2021.7.30（金）、31（土）

会場：高知県立美術館ホール

「いろいろいろを楽しむ演劇Project」の一環として「藁工ミュージアム」と「シアターTACOGURA」が中心となり、1年をかけ物語「星の王子さま」をお芝居にした。

連携機関等：シアターTACOGURA・NPO蛸蔵／高知県立美術館／一般社団法人 高知県聴覚障害者協会／社会福祉法人 高知県社会福祉協議会／からくり劇場／川村雑貨店／高知演劇ネットワーク演会／もりたうつわ製作所／三谷（POLA）／地球の子ども基金／エンゼルハンド／ハナカタマサキ／ハナカタマサキバンド／ゆっくりとじていく。／屋根裏舞台／ヨシダワークス／TRY-ANGLE／有限会社 金高堂書店／高新プレイガイド／高知 蔦屋書店

障害者の文化芸術創造拠点形成プロジェクト DANCE DRAMA[Breakthrough Journey] 舞台公演上映会&トークセッション in 高知

2021.9.12（日）

会場：蛸蔵

総合演出・長谷川達也（ダンスカンパニーDAZZLE 主宰）のもと、国籍、文化、障害の有無を問わない多様なダンサーが共創したDANCE DRAMA「Breakthrough Journey」（2021年1月30・31日公演）の公演映像上映とともに、演出家・出演者によるオーディションから公演までのメイキングを語るトークセッション。

連携機関等：文化庁／独立行政法人日本芸術文化振興会／国際障害者交流センタービッグ・アイ／ダンスクリーム／NPO蛸蔵

トークゲスト：長谷川達也（ダンスカンパニーDAZZLE主宰・ダンサー・演出家・振付家）／小倉卓浩（ダンスクリーム主宰）／名和美幸（ダンサー）　進行：松本志帆子（藁工ミュージアム学芸スタッフ）

写真はすべて『演劇公演「祝祭 音楽劇 小さな星の王子さま」』の様子

演劇公演等

to R mansion「The SHOW」

［公演］2021.12.5（日）

会場：高知市文化プラザかるぽーと小ホール

［ワークショップ］12.4（土）

会場：高知市文化プラザかるぽーと小ホール

パフォーマンスカンパニーによる公演とワークショップ。令和3年度第71回高知県芸術祭協賛行事。

連携機関等：公益財団法人高知市文化振興事業団

藁工ミュージアム×高松ワークショップLab. ワークショップ「絵本で遊ぼう！～星の王子さま編～」

2021.8.8（日）

会場：藁工ミュージアム展示室

演劇公演に連動する展覧会「あなたの星の王子さま」の企画の一つとして展示する作品を創作するワークショップ。

講師：高松ワークショップLab.

演劇ワークショップ「田上豊と遊ぼう！わくわく演劇体験！」

10.28（木）

会場：藁工ミュージアム展示室

演劇公演に連動する展覧会「あなたの星の王子さま」の会場を活かして演劇で遊ぶワークショップ。

連携機関等：高知演劇ネットワーク演会／高知県立美術館／公益社団法人全国公立文化施設協会　講師：田上豊（劇作家／演出家／田上パル主宰／富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督）

アシスタント：村井まどか（俳優／ワークショップファシリテーター／一般社団法人江原河畔劇場代表理事）

身体ワークショップ「自分の身体と身体の動きを知ろう」

2021.1.22（土）、23（日）、29（土）、30（日）／2.12（土）、13（日）

会場：ダンスクリーム

自分の身体や身体がどう動くのか、身近なものを使ったりいろいろな動きを行いながら探ってみる全6回のワークショップ。

講師：小倉卓浩（ダンスクリーム主宰）

▲身体ワークショップ「自分の身体と身体の動きを知ろう」の様子

その他

相談事業

場所：藁工ミュージアム他

文化芸術活動に関する相談を随時受付。

連携機関等：相談内容により適宜

作品調査

2021.4.8（木）

県内作家の作品調査。

連携機関等：すさきまちかどギャラリー

県内活動情報収集「わかふじ寮・ごり工房・四万十工房の作品展覧会」

2021.10.17（日）

会場：岩本寺

「高知県社会福祉法人経営青年会」主催によるシンポジウム「アートがひらく福祉とアートのより良いあいだがら」に合わせ開催された展覧会の視察。

県内活動情報収集「ハナカタマサキさんといろいろな楽器を使って演奏しよう」

2021.12.26（日）

会場：すさきまちかどギャラリー

「須崎市社会参加支援事業」の一環で行われたワークショップの見学。

日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル in 近畿ブロック&グランドフィナーレ 展覧会「アール・ブリュット －日本人と自然－ BEYOND」への協力

2022.2.11（金・祝）～3.21（月・祝）

会場：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、旧増田邸、まちや倶楽部

展覧会への県内作家出展コーディネート。

連携機関等：社会福祉法人グロー～生きることが光になる～

事例紹介 鳥取県

Yさん

鳥取県　あいサポート・アートセンターの事例紹介

Yさんは、鳥取市にあるアートを仕事にするB型事業所に週2回通い、作品の制作をしている30代の女性です。事業所の前身であるアート教室に高校3年生から通い始め、10年以上アート活動をされています。

Yさんは「ことば」で作品を制作するアーティストです。思いついた言葉をそのまま紙に書き、それを等身大の自身の模型や腕の模型に貼り付けるといったスタイルで作品を制作、発表されています。Yさんの作品は「夢をつかむまであきらめない」「一緒にいこうぜこの先のみらいへ」といった前向きな言葉や、気持ちがほっこりする言葉などがぎっしり綴られており、見る人の背中を押してくれるような作品です。

事例経過

Yさんがアート教室に通い出した当初「ペンと紙があれば小さな絵をいっぱい描く、それが面白い」と母親から聞き、教室では毎回画用紙を用意されていました。しかし、画用紙に絵の具で絵を描くことはあっても、母親から聞いていた“小さな絵”を見ることはできなかったそうです。次第に描くものがなくなったという感じで棒人間が出てきた時に、スタッフが「絵の具じゃなくてもいいんだよ」と声をかけ、普段使っているペンやボールペンに替えることを勧めました。画用紙には絵の具で描かなくてはいけない、と思い込んでいたようです。

それからは、やってみたいことや本人の好きなことをスタッフが丁寧に聞き取り、それが作品づくりに活かされていきました。そして、アート教室から福祉事業所に変わってからは、初めて自分以外の人のものづくりを垣間見ることになり、制作の幅が広がっていったようです。

取り組みの内容

アート活動の中で、他の人が文字を使った作品を制作しているのを見て「自分は字を書くことには自信がある」と文字を書き始めました。最初は、書いた言葉の付箋を画用紙に貼っていましたが、画用紙ではせっかくの言葉の魅力が埋もれてしまうのではないかと、スタッフがYさんの等身大模型に貼るアイデアを出し、今の作品のスタイルが生まれました。

作品を展覧会で発表すると非常に好評で、それを見て本人も自信を深めていったようです。

まとめ・今後の展望

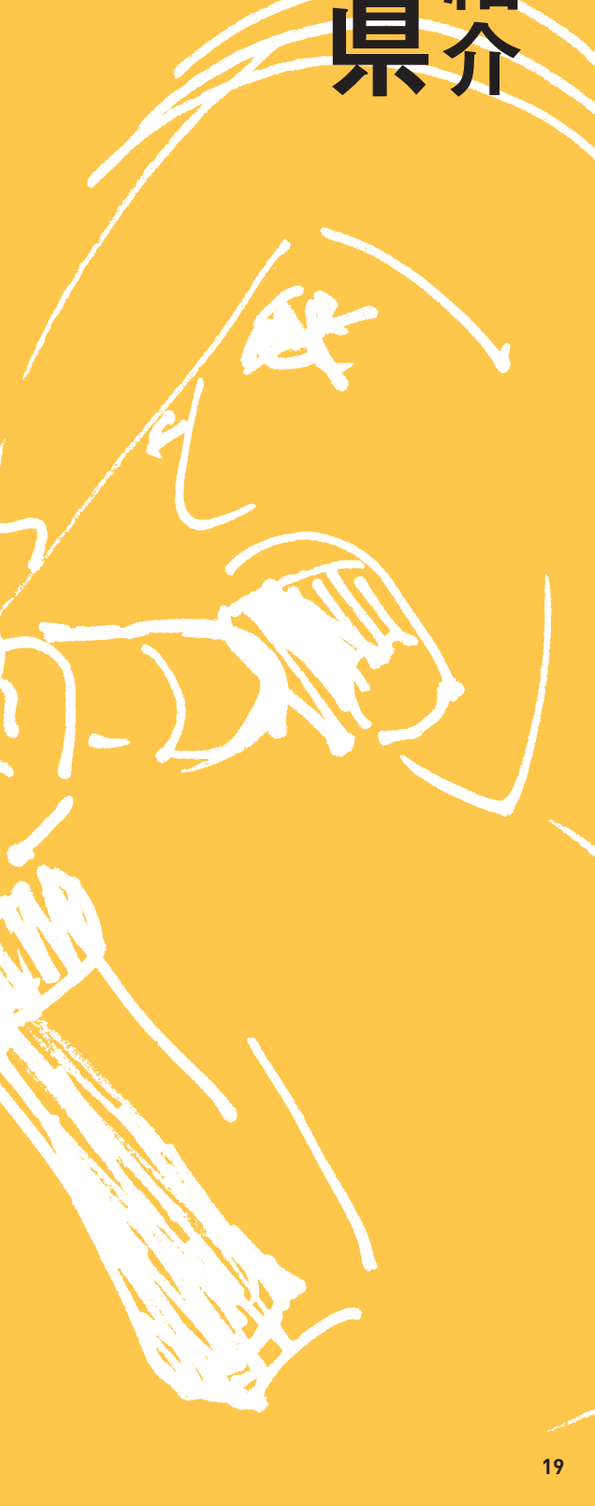
昔のYさんは、どちらかというとポジティブな方ではなく、人前に出ることや自分のことを話すのも苦手だったそうです。しかしアート活動を始めて、特に事業所での他のメンバーとの関わりや制作の中で、プラスになる経験をたくさん積み上げてきたことで、どんどん自分の良さを出していけるようになったようです。今では、NHKで特集されるなどマスコミ対応もそつなくこなし、商品撮影のモデルもできるマルチな才能を披露されています。

事例紹介 香川県

Kさん

香川みんなのアート活動センター KAGAWAMOVES の事例紹介

Kさんは、自閉症スペクトラムにより、他者とのコミュニケーションが苦手な19才の女性です。
自閉症スペクトラムの影響により、他者との関わりの中で、不必要に大声を出したり、行動が荒くなり、他の利用者やスタッフを叩くなどの行動が見られた。



事例経過

自閉症スペクトラムの影響により、他者との関わりが苦手で、自分に注目してもらう際に適切な言葉を使用することができず、暴力的な行動や大声を出したり、物を壊したりする行動が多く見られた。養護学校卒業後の進路を決める際も、これらの行動の為、事業所の受け入れが難しいことがあった。

本来は自分の気持ちに気付いてもらいたい行動なので、その部分を上手く引き出すことにより、本人に自分のことをスムーズに表現してもらい、周囲とのコミュニケーションをスムーズにとることができるようになれば良いのではないかということとなり、支援を行った。

取り組みの内容

周囲がビックリするような大きな声も音楽(ロックなど)の中ではごく普通な音量となるので、それを受け入れて肯定する事により、本人に大声の適切な使用法を身につけてもらい、周囲とのコミュニケーション力を高めてもらう。音楽活動による自己肯定感を高めることにより伝える表現力を高め、暴力的な行動の減少を目指している。

まとめ・今後の展望

音楽活動での自由な自分の表現は、彼女にとって喜びや自己肯定、自己実現を高める良いきっかけになっている。今後はこの活動を通じて、時間や場所にとらわれないスムーズな行動をより後押しできるように支援を行っていきたい。

事例紹介 広島県

Aさんは脳性麻痺あり、車椅子を使っている40代男性です。仕事も熱心に取り組み、陶芸やダンス、一人で県内外問わず旅行に行くなど活発に動かれていましたが、40代に入り入退院を数回繰り返した後、健康や体力の不安からや自信低下などが見られるようになっていました。

事例経過

健康の不安や自信のなさから、仕事を休む日やイベントなどの参加を断ることが増え、一人で行動することが少なくなってきました。当センターに電話がかかってくるようになり、今の自分の状況や気持ち、周囲に対する不満などを話しされることが増えていました。

取り組みの内容

まだ、体力に自信を取り戻せていない状況ではありましたが、何度も電話をかけて来られるには理由があると考え、演劇のワークショップの参加を促し、ご参加いただきました。

はじめは、支援者と一緒に参加されていましたが、2回目以降は一人で参加されるようになりました。劇団員の一人として、何度もの稽古や公演を体験するにつれ、表情も明るくなり、元々もっていた積極性や活動意欲、自信が徐々に戻っていきました。

まとめ・今後の展望

演劇に参加するようになってから、Aさんが当センターに電話をかけてこられることは減っていきました。そのことから、Aさんの電話は「自信のない自分を切り替えたい」というSOSだったのかなと感じています。

今、Aさんは表現活動だけではなく、生活面でも新しいことにチャレンジしておられます。

多様な表現を受け入れてくれる環境は、人の心をほぐし、自己肯定感を育むことができることを改めて実感しました。

A さん

広島県アートサポートセンターの事例紹介

現場を巡る対談

鳥取 阪井悠華（あいサポート・アートセンター）
妹尾恵依子（アートスペースからふる）

×

広島 保田香織（広島県アートサポートセンター）

×

香川 髙橋修（香川みんなのアート活動センターKAGAWAMOVES）

聞き手　岡村忠弘（中国・四国アール・ブリュットサポートセンターパスレル）

鳥取県の事例

――それでは最初に、あいサポート・アートセンターの阪井さん、Yさんの事例紹介をお願いします。

阪井　妹尾さんの事業所「アートペースからふる」に通われている30代の女性、Yさんの事例（➡20ページ）を書かせていただきました。

私自身はYさんにお会いしたことが実はなくて、Yさんが出演されているニュース番組を拝見したり、Yさんが紹介されているフリーペーパーなどを見て知りました。あとは妹尾さんが地元の新聞に書かれている記事がありまして、それも拝見させていただきました。

Yさんは高校3年生の時にアート教室に通い始めて以来、10年以上にわたり活動をされています。作品の特徴は、「言葉で作品を作られている」ところだと思っています。ニュースでも作品を制作されている場面が流れていたんですが、ものすごく集中して一個一個の言葉に魂を込めるような感じでした。仕上がった作品は、Yさんの形をした立体の造形物にYさんが書いた言葉がぎっしりと書かれているような感じで、「夢をつかむまであきらめない」とか「一緒に行こうぜ この先のみらいへ」みたいな、ちょっと前向きな言葉というか、見る人が元気をもらえそうな言葉がたくさん書かれていて、強いエネルギーを感じる作品です。

Yさんの今に至るまでの経過を読ませていただくと、どちらかというとネガティブな性格の方だったようなんですけれども、アート活動をしながら自分の言葉をどんどん出していくことによって、アート活動だけでなく普段の生活もどんどん前向きになっていったんだということを感じました。

――妹尾さんとYさんはどれくらいの付き合いなんですか？

妹尾　高3くらいからなのでもう15～16年くらいです。「からふる」の前身はアート教室だったんですが、その教室が始まった年からきてくださっています。小学生時代の彼女の姿も見ているので本当に長い付き合いです。

――今回、Yさんの事例を紹介しようと思った理由は？

阪井　妹尾さんが地元の新聞に何人かのメンバーさんのことを取り上げて記事を定期的に掲載していたんですが、それを読んだときにどんな作品なんだろうというのがまず気になりましたね。あとはどういう風に変化をしていったのかというのも気になったところで、そのことを聞いてみたいという私の興味から入ったところがあります。

――皆さんに提示をお願いした事例は「良くなっていった事例」や「うまく行った事例」が多いと思うのですが、事例

を選ぶ時にそういうバイアスはかかっていますか?

阪井　かかります。

保田　「効果」というか「変化」を伝えないといけないかなと思います。芸術文化の意義じゃないですけども、なにかプラスになることを伝えていきたいと思いながら活動をしているので、当然バイアスはかかっていると思います。

——芸術文化に触れたことでうまくいった事例もあれば、逆にご家族が困っているような事例もあるのではないかと思っています。たとえば、絵を書くことを覚えたあまりに家が散らかり放題になってしまったとかですね。そういう事例にもきちんと日が当たるような社会になってほしいなと思うんです。

髙橋さんは自分のところで生活介護をやられていると思うんですが、生活介護に通ってくださっている利用者さんとかで同じような体験をしている方、作品にはなってないけれど同じような体験されている方というのは事業所にはたくさんいらっしゃるかと思います。たとえば、生活介護で関わることでちょっと明るくなったなとか。

髙橋　音楽を通じて明るくなった、というのはありますね。

——活動を通じて、その人の性格や生活の中でのご家族の関わり方が変わっていったっていう事例というのはたくさんあると思うんです。作品が生まれなくても良くて、その過程が僕は大事なのかなと。だから「からふる」という場所で妹尾さんと一緒に作り上げていく過程を体験することでYさんが変わっていったのかなと。

妹尾　私の事業所はアート作品を作るのが仕事ということを謳っている事業所ではあるんですけど、私自身はあまりアートの力っていうのを信じていなくて。アートをやるからいいんだっていうことを言うつもりもないんですよね。

アートは手段であって他にもいろいろな方法があると思うんです。なかなか言葉にするのが難しい人たちや言葉の獲得ができてない人も多いし、しゃべるのが苦手な方も多いので、そういう人たちにとっては作品作りっていうのはゆっくり自分を外に出すっていう意味でいい手段だなと思っています。

それは文章でもいいし、音楽でもいいし、ダンスでもいいし、何でもいい。私が彼らに指導できるのがたまたまアートの制作だったからこういう形になっているだけだと思っています。

また、一長一短だなと思いながらやっているところもありますね。学生時代は生活にまとまりがあって親の言うことも聞くし施設での立ち振舞いも良かった方が、アート活動に取り組むことで、今まで「こうじゃないといけない」と信じていたことが崩れたりするんですよね。それで混乱したりすることもあるんですが、それでも世の中からその人が評価を得たりすると、家族は大変だけど支援しようという気持ちにもなっていく。

——アートというのはひとつの手段なんですよね。たとえば別にスポーツでもいいわけで、その方の生活がよくなっていったり何かが変わるキッカケとして、たまたまアートがはまったということだと思います。

また、活動を通して状態が悪くなったりとか、親からみてお利口さんだった方が、アートに触れたことによってちょっとまとまりのない子になるとかも、それは私たちでもあることじゃないですか。「遅れてきた反抗期」みたいな人だっているわけで。ゆっくりと流れる時間をどれだけ我慢して支援者が見ていくことができるかというところだと思います。

保田　「作り上げていく過程」がアートの魅力だということを感じています。「アートをしない」っていう選択肢ももちろんあっていいのに、どちらかというと支援者が用意をしすぎていて、なにかしないといけないような雰囲気を作ってしまうのは嫌だなと感じています。

でも、この事例はマスコミにも取り上げられたりして評価を受けた人たちの一つの事例でもあり、わかりやすいなと思いました。評価されないけどひたすら作ることが好きで続けておられるアーティストさんもおられるので、作ることがとにかく好きで続けておられるといった事例も取りあげていけたらいいのに、ということも感じました。

——ご家族も変わっていったところはありますか?

妹尾　私たちが目指しているのは「アーティスト」として独立してもらうということが実は大きな目標で、そのための支援をご家族ができるようになってほしいということが最初からあったんですね。だから、作品展があればその準備や片付けにもできるだけ参加してもらって、額の入れ方とかヒモのかけ方とかそんなことから触れてもらえるような機会を作るようにしていました。

Yさんのお母さんは積極的にそうした場面にも参加してくださっているんですが、有名になりすぎるのが心配という部分もあって、今はあまりフィーチャーしないでほしいというふうにお母さんは思われているみたいなんですね。本人はもうどんどん前に出たいという感じなので、そこのマッチングをどうするかなというのは今後の課題です。

——絵を生業(なりわい)にして生活していきたいと言われる方からの相談は結構あるんじゃないかなと思います。そのとき助言できることは、「こんな公募展がありますよ」とか「どこそこに出展されてみてはどうですか」といったようなことが多いのではないかと思います。

この議題についてパスレル内部で話し合いを重ねていく中で、自身も現代美術作家である土谷享(パスレル芸術文化活動支援コーディネーター)が、「アーティストのみんなは、絵で生活をしていくために自分で交渉して安い展覧会場とかを探してきたり、ビラ配りをしたりといった地道な作業をやっているんだよ」という話をしていたんですね。

土谷は、障害のある方に公募展の話を伝えるだけではなく、そういったアーティストの実情をも教えていかないと、将来独立していくことはなかなか難しいのではないかということを心配しているんですね。お腹がすいてる人におにぎりを与えるような支援ではなく、そもそものお米の作り方からきちんと教えるというところをしないといけない、というわけです。

阪井　確かにそうですね。個人でアート活動をされている方から直接あいサポートセンターに相談のお電話をいただくこともあるんですが、どこから手をつけていいか分からないとか、お金の管理をどうしたらいいんだろうとか悩みはいろいろです。あと、会場の問題や展示の準備が一人でできるのかとか、やっぱりそういったところを考えて諦めている方が多いということも感じています。

——Yさんは、自分ではどんどん前に出ていきたいと思っているけど、お母さんにはあまり有名になってほしくないという思いがある。そこに折り合いをつけていくのは難しいですが、Yさん自身は今後有名になって絵で生計を立てていきたいと思っているんでしょうか?

妹尾　そうですね。ユーチューバーになりたいとかそういう華やかな世界に憧れているのはすごくわかるんですけど、どこまで本人が頑張れるのかなっていうのを今見ているところです。

あと、彼女のできるところがどこまでで、ここからは支援が必要ですよっていう〈説明書〉を作るのが我々の仕事だとも思っているんです。会場を借りに行くとかそういうことはおそらく彼女にはできないだろうから、それをもしできる人が支援してくれたら、この部分は手伝ってあげてくださいということがわかる〈説明書〉です。

香川県の事例

——次の事例に行きたいと思います。香川県みんなのアート活動センターの髙橋さんよろしくお願いします。

髙橋　私たちの事例では、自閉症スペクトラムで他者とのコミュニケーションが苦手なKさん(➡21ページ)を紹介させていただきました。

彼女は、事例経過にもあるように、不安なことがあったりすると、それをきっかけに大声を出したりとかモノを壊したりしてしまうといったことが多かったんです。私たちの事業所に来た時にもガラスを割ったりとかがあってどうしたらいいのかなと思っていたんですけど、大きな声をだす割には人との関わりも結構好きな方だったので、そのあたりを上手にしてあげたらいいのかなということをスタッフで話し合いました。

それで私たちがしている音楽活動、その中でもロックバンドの活動に彼女を誘いました。というのも、ロックバンドは「大きな声大歓迎!!」なんですよ。大きな声を出すことが苦手な人がそもそも来てないというか、大きな声を出すのがOKな人が来るところなんです。つい先日も、高松の街角で音楽祭があったんですが、曲目の紹介やメンバー紹介を彼女にしてもらいました。

彼女に自分のスタイルでいいんだという、いわば「居場所」をつくってあげることによって、彼女は人を叩かなくなりました。今後も音楽活動を通じて可能性を伸ばしていけたらなと思っております。

——自閉症スペクトラムの方に対して、ロックという媒体を通じてその方の特徴を強みに変えていった事例だと思います。私たちの運営している事業所にも自閉症の方がおられますが、こういう活かし方はすごく大事だなと思いました。安心感というか、安全基地を作ることの重要性みたいなところがわかりやすい事例ですね。

阪井　本人が周りの人に認めてもらった感とか、自分がここにいていいんだっていう安心感みたいなものが音楽とハマったところもあると思うんですが、周りの方も否定から入るんじゃなくて彼女のいいところを上手に生かした支援をされたんだなっていうのをすごく感じました。

妹尾　どれくらいの期間で落ち着いてきたんですか?

髙橋　それが、あっという間に落ち着いたんです。学校でやっていた音楽とは全く違い、ロックは何をやっても大丈夫なので、どこで叫ぼうかどこで太鼓をたたいてもいいんです。何でもいいよ、ということであっという間に、ずっと前からいる人みたいな感じでバンドにも馴染んでいったので、本当に彼女に合っていたんだと思います。

妹尾　良い出会いがあってよかったなと思います。乱暴だったり大きい声を出してしまうことで周りとうまくやっていけていなかったころは、本人はしんどかったというか、生きづらさを感じてたんだろうなと思います。

自閉症の方は私たちが想像できないぐらい不安定な世界に住んでいると私は思っていて、視覚情報や聴覚情報も多分私たちとはずいぶんと違う状態で脳に入ってきてい

ると思うんですね。もうなんか叫ばずにはいられないんだろうなと思うんですが、それを禁止されてしまうのはもう本当に苦痛でしかないだろうと思うので、いい出会いがあってすごく良かったと思います。

――現在は何かを壊すといった行為は無いんですか?

髙橋　今は何も壊しません。何かちょっと悪さするよっていうサインを出して、スタッフさんがそれはダメだよ、コラ待て～なんて追いかけて、キャッキャキャッキャと逃げていく・・・といったような、楽しい遊びに変わっています。別に悪さしないんです。

　だからなんかしてやるぞみたいなことをしようとするんですけど、スタッフさんがやってはダメでしょ～みたいな感じで言って、本人がワーって笑いながら逃げていってそれを私たちは追いかける。私たちも笑いながらコラコラ～って追いかける。ちょっと変なコミュニケーションですけど、そういうこともできました。

――「音楽」が生まれたことでその方も安心を得て、スタッフも〝怖い人じゃないんだ〟とか〝この人にはこういう接し方をしたら大丈夫なんだ〟という、何かの「共通言語」を与えてもらっているような感じを受けるんですよね。逆に、音楽を通じてみても難しいという事例はありますか?

髙橋　そういう方はやっぱり普通のバンドと一緒でバンド活動から離れていきますね。また、本人さんは喜んでいるんだけど親御さんがなんでもっと本人をフューチャーしないんだとか、自分の子を真ん中に持ってきてくれとかそういうこともありまして・・・。みんな平等なんですということで話しあったりもするんですが、ちょっと難しい事例とかもあったりしました。

――保育園や幼稚園の運動会の撮影に入っているカメラマンさんとかは、園児を誰一人漏らすことなく平等に撮らないといけないとかあるそうですが、昨今どの世界もうるさいんだなというところはありますね。

保田　親御さんや支援者の思いが強くて、本人の意思決定がないがしろにされやすかったりするということは、サポートしながらも感じることが多々ありますね。

――本人の意思決定をどうやって支えていくか。

保田　本人はただ「楽しいからやりたい」という思いが強いのですが、「写実的な絵＝良い絵」といったような価値観で絵を習わせたいという親御さんが多いんですよね。

　だから、私たちのところの絵画教室では、絵が上手になるための「習い事」じゃないですよ、ということを前もって親御さんに伝えています。

――Kさんのようにご家族も納得するような結果を出していくという、もしかしたら本人の意思決定の支えになったりするのかも知れませんね。たとえば音楽の経験によって暴力をふるわなくなったとか、絵を本人が自由に描くようになったことで無為自閉に過ごされてた日中の活動が変わったとか、こういう言葉も出るようになったんですよとか・・・。

**　親御さんの気持ちと私たち支援者の考えとの間に乖離(かいり)はあるかもしれないですが、そういったことは妹尾さんの事業所でもありますか?**

妹尾　癖のある、まさに障害者アートらしい絵を書かれる方が私たちの事業所にいるんですが、そのお母さんは写実的な絵を描くことを望んでいて・・・なので、お母さんに作品を見せるといつも「こんな絵ですか」という反応だったんです。

　そのうちお母さんが写実的な絵を書きたいという気持ちを持っていて、子供を通してそれを体験したいみたいなところがあることもわかってきて、今はそのお母さんにうちのアート教室に通ってきてもらってます。

――音楽にも絵画にも通じるのかなと思うんですけど、そうなっている背景には教育の問題もあるのではと思います。絵ならば写実的に描けていないとダメ、みたいな基準が刷り込まれていて、そこの教育から変えていかない限りはなかなか難しいじゃないかなと思っています。

髙橋　その人なりの「シャウト」ができたらいいと思うんですよね。ロックはその人のまさに心の叫びなわけですが、その叫びに対してああ君は上手だね下手だねと決めるのは、私にはよく分からないです。ああ、心の底から叫べているね!とか、そんな感じでいいのかなと思います。

　なんにせよ、うちはちょっと変わった活動をしているかなと思ってるんですが、みんな喜んで来てくれているので、それはそれでいいのかなと思っているところです。

――阪井さんはいかがですか?

阪井　私も少しだけ学校で働いていたことがあるんですけど「評価」ってすごく難しいんですよね。学校での評価基準って一律っていうか差を示さないといけないというところもあるんですが、この子は本当はもっと評価してあげたいけど、ちょっと他の子と比べると・・・とか、そういうところも出てきてしまって。一人一人をちゃんと評価してあげるのって難しいなということは学校時代に思っていたことで、学校での評価基準と親御さんの評価基準って似ているなということを感じます。

　やっぱりそういったことから解放されて、自分の好きなようにやっていいんだよっていう環境に入ったとき、すごく楽しそうなんですよね。誰かに上手だねとか言われるために描いたり作っているというわけではないんだなということも感じます。そういうところで人って変化していくというか、自分の思いとかを自由に表現できる場があるから変化していけるんだなということを思いました。

――僕は絵とか下手ですが、こう描いたらうまいって言われるだろうなとか、こういうのを描いたらウケるだろうとか、社会的な打算みたいなところが入ってくる時点で僕はもうすでに絵を楽しんでないんだな・・・と思ったりします(笑)

**　Kさんはまだ19歳とのことですが、今後はどうなっていくと思いますか?**

髙橋　そうですね。もっと色んな人と出会っていろいろなところで演奏して、いろいろな経験積んでもらって、いっぱいおしゃべりしてもらったらいいなと思っています。いっぱい人に出会っていっぱい経験を積んでいくと、それでまた彼女の音楽も変わってくると思うんです。

　初めて見るお客さんとか初めて行く場所とかで演奏する時は、私たち支援する側も一緒にドキドキするんですが、そのドキドキ感というのを大事にしながら経験を一緒に積んでいけたら、それでまたいい感じになっていけばいいかなと思っています。

――絵を描くことや舞台芸術、音楽活動などを楽しんでもらえたらという思いの延長線上に、それを通じてこの人がこういうふうに変わっていってくれたらいいなということを想像というか、リンクさせて関わったりされていますか?

阪井　その方がアート活動することによってやっぱり何か変化が見られたら嬉しいなとは思って、それがいい変化なのかをよくない変化なのかちょっとわからないんですけど、その方の新しい一面が見れるというのはどういう形であれ嬉しいなと思います。

保田　私は、本人が生きていく中で出会う様々な場面のひとつにアートがあるということが、豊かになる手立てだと考えています。そして、仕事であれアートであれなんであれ、そんな場面の「引き出し」をいっぱい増やしていって、たくさんの人に支えられて生きていくことが私はいいなと思っています。なので文化芸術だけで変化を想像することは少ないです。

髙橋　いっぱい深く考えていたらいい音を出せなくなるので、行き当たりばったりじゃないかって言われるかもしれないですけど、あまりその人をどうしようかとかいうことは考えないようにしています。

　できるだけ楽しんでもらって、来ているお客さんにも楽しんでもらって、本人ももちろん楽しんで皆がいい感じになっていい空間を作っていければ、それで良いかなと思います。音楽でどうしようこうしようって考えたら何もできなくなるので考えないようにしていますね。

妹尾　私は割とその先まで考えちゃうっていうか。私が関わってきた人たちがそれこそ15年とか付き合ってきていて、割と高齢化してきている。ダウン症の人とかは老化が早いので、50歳くらいになったらもう老化の域になってくる。施設に入るのか在宅の支援になるのかとか、その後の人生をやっぱり思ったりもします。

　Yさんのお母さんが私の教室にはじめて来たときに最初に言われたのが、自分の方が先に死ぬだろうからこの子はいずれ施設に入ることになると思う。でも、施設で何もできない子じゃなくて、休み時間とかになんかコツコツ作れるような技術というか、そういう手先を養ってほしいということでした。

　もし彼女がこの先施設に入って何にもつくらなくなっても、あの人ってなんか若い頃すごかったみたいだよ、みたいな風に言ってもらえたほうが豊かだなっていうふうに思うので、そういうのが一つでも増えればいいなと思いながら支援してます。

広島県の事例

――先のことを考えてやる場合もあるし、先のことを考えすぎると支援がうまくいかない場合ももちろんあるでしょうしね。人としてアートだけの場面で生活しているわけではないので、それを使い分ける能力も大切なのかなと思ってお聞きました。

**　最後、広島県の保田さんの事例にいきたいと思います。**

保田　Aさん(➡22ページ)は脳性麻痺がある男性の方です。私がこの方と出会ったのは約25年前ですから、ずいぶんと長いお付き合いになります。

　Aさんは熱心に仕事もされていて、陶芸とかダンスとか一人でも県内外問わず旅行に行かれる方でした。でも、40代に入ってからは入退院を繰り返しされるようになってしまい、体力や健康面の不安から自信が一気に低下してしまいました。

　通われていた就労継続支援B型事業所での仕事を休むようになったり、イベントへの参加もあまりされなくなってしまい、旅行にも行かなくなり、一人で行動することに自信がないと言って常にヘルパーさんや親御さんについてもらって移動するようになってしまいました。

　以前は同じ事業所だったのでその時は直接話をしていたんですが、私の職場が変わった後は頻繁に今の自分の

状況だったり気持ちだったり、その他さまざまな不満を電話でかけてこられるようになりました。

それでどういう風にしたらAさんに今までの自信を取り戻してもらえるのか?ということをずっと考えていたのですが、新しいことにチャレンジするきっかけにと思い、センターで主催した演劇のワークショップへお誘いしたんです。

はじめはヘルパーさんや支援者の方と一緒に参加されていたんですけど、劇団員の方々が気持ちよくサポートしてくださったことですぐ一人で参加されるようになりました。発表に向けての稽古もあったんですが、積極的に参加されるようになって表情も明るくなり、自信をずいぶんと持ち直してこられました。

演劇に参加するようになってからは、Aさんからセンターへの連絡はほとんどなくなりました。その以前にあった不満とかはやっぱりどうにか自分を変えたいんだというSOSだったんだろうなっていうのを感じています。

また、身体障害の同じようなお友達との交流も再開されるようになって、さらには生活面も変えようと思うとのことで、ずいぶん前からの夢だったという一人暮らしも始められました。いろいろな人に出会って受け入れてもらえる環境に接することで、自己肯定感を育むことができたんだろうなと思います。

今後の展望としては、演劇も続けていくとは思うんですが、健康面がやっぱり加齢とともに心配になると思うのですが、いろいろな人に関わってもらいながら自分のやりたいことをひとつひとつ叶えてもらえるような生活を送っていただけたらなと思います。まだ最終的な将来の夢とかはAさんと語りあっていないのでこれは私の一方的な展望ですけど、そうなっていけばいいなと今考えています。

——なかなか付き合いの長い事例で保田さんの想いもこもっている事例なのかなと思いますが、この事例にしようと思った理由とかありますか?

保田　障害のある方って割とご家族でお住まいの方が多いんですけど、一人暮らしをするにまで生活が大きく変化したという事例だなと思い、提示しました。

出会いにより、同じような障害を持っている人たちも独立して生活しているということを、自分で情報収集して、できる方法を自分なりに考える機会になったこともあると思います。

——演劇ではどんな役をやられているんですか?

保田　カッパの役をされています。メインの役どころではないけれど、演劇って一人一人の役が一つずつ大きいんですよね。主役ではないですがその役がないと成り立たない。だから、そこで自分の存在とかを何気なく感じてこられたんじゃないかなと、Aさんの行動を見て思っています。

——髙橋さんはこの事例を見て思うことはないですか?

髙橋　そうですね。私の知らない世界のお話を聞けて嬉しいなと思って聞かせてもらっています。自分を表現できる場所があるって素敵なことかなと思います。それでやっぱりそれが実現することで前向きな気持ちになれるっていうのは、いろいろなジャンルでも共通しているのかなと思って聞かせてもらいました。

——先ほどのKさんの「居場所ができた」事例と共通することがあると思います。一人一人の役割があるということも大きいと思うんですが、それと並行してたとえば劇団員の仲間ができたとか、たとえばこれが絵画教室で通う仲間でも良かったのか、それとも劇団の演劇が良かったのかとかなどはありますか?

保田　この方は演劇でよかったと思っています。障がいの有無に関わらず年下から同世代まで幅広い世代の方が関わっていること。あと割と麻痺があって言葉が出にくいけどみんなセリフが出るまで待ってくれる環境、ステージという今までにない空間に置かれた中で表現をするという緊張感など初めての体験だったので、Aさんにとって刺激が大きかったんだろうと思います。

阪井　演劇ってみんなで作り上げていくという感じがあるので、その周りの方と一緒にコミュニケーションを取りながらやっていくという面では一人で創作活動をするのとは少し違うのかなと思いました。

一つの役が与えられる事で自分に役割が与えられるというのは普通に私たちでも嬉しいことだと思うんですが、役割が与えられることで責任感だったり自分も参加してるという喜びが感じられたのではないでしょうか。そういう面では、その方と演劇とがすごくマッチしたんだと思います。

妹尾　レポートに自己肯定感が高まったり、変わりたいっていうSOSだったんじゃないかという一文があったと思います。変わりたいけれど年齢や障害を理由に自己肯定感が下がっている自分に対して、演劇というペルソナ的な仮面をかぶり、「自分ではないものを演じる」ということがハードルを跳び越えるのにとても楽だったんじゃないかなって思います。

しかも、チームがあってみんなが自分を待っていてくれるということも自信になっていてすごく良い効果がある。いいサイクルにハマったんだなと思い、すごく幸せな気持ちで聞いていました。

——ありがとうございました。皆さんの考えていることが直接お話を伺うことでより深く知ることができ、この座談会をやってみてとてもよかったなと思っています。また来年度もこういう事例を通じて話をできる機会を設けられたらと思います。最後に皆さん一言ずつお願いします。

保田　色々な考え方や情報、各センターさんの活動など、これからもぜひ共有いただけたらと思っています。

阪井　私のところは美術に特化しているところがあって、広島の演劇だったりとか、香川の音楽だったりとかすごく新鮮に聞かせてもらいました。また色んな事例が知れたらいいなと思います。

髙橋　皆さんとお話ができてすごく面白かったです。絵のこととか何もわからないのでいろいろな方のお話聞けるということが本当に面白いなって思いました。

妹尾　困っている事例とかを持ち寄ってみんなでこういう対応はできないかなというのをあーだこーだと話す会もあったら面白いんじゃないかなと思いました。また何か機会がありましたらお声がけいただけると嬉しいです。

——今後も参加して頂けたら嬉しいです。本当に困ってる事例とか、こういう事例の場合どうするかというのをみんなで持ち寄って解決していくのが本来の事例検討であったりとかするのかなと思います。またそういう企画も考えていけたらなと思っています。皆さんおつかれさまでした。

事例紹介 高知県

演劇公演「祝祭 音楽劇 小さな星の王子さま」の出演者やミュージシャン、スタッフたち出演者には、身体など目に見える障害のある人や聴覚など一見わかりにくい障害のある方、弱視ほか手帳はないが配慮が必要な方、0歳児の母などがいた。年齢や職業、生活環境など十人十色で、この事業がなければ日常では出会わなかったかもしれない人たちが集まった。

Y さん

藁工ミュージアム分室の事例紹介

事例経過

出演者の多くは演劇経験がなく、動機は様々で、お芝居を一度やってみたかったという方もいれば、障害のある人と一緒に作品作りをしてみたかったという人、自分の中にある壁を乗り越えたい人など様々だった。また、ミュージシャンやスタッフは障害のある人たちと一緒に作品づくりを行うのは初めてだった。

大半が初めての創作現場では、「障害者」=「支援される人」、「健常者」=「支援する人」ではなく、その時々に現れる何かしらの壁を乗り越えようと共に向かい、よい作品に向かうことだけにただ励まし合い、対等に存在していた。ここで生まれたよい関係性は作品づくり以外での交流も自発的に生み出している。着物を着る会を行ったり、聴覚障害のある方がやっている手話カフェに参加したり、誘い合ってミュージシャンのライブや観劇に行ったりと、それぞれの行動範囲を広げた。そしてその交流は定期的に続いている。

取り組みの内容

年齢や性別、障害種別や程度、経験の有無を問わず出演者を公募し、障害のある人を含む様々な個性を持つ人たちとともに「星の王子さま」(原作:サン=テグ・ジュペリ)の演劇作品をつくり、上演した。

まとめ・今後の展望

この事業を通じ、内にある目には見えない壁を乗り越えたり、新たな気づきを得たり、何らかの変化を感じたというアンケートを大半の人から得た。文化芸術活動は新たな交流を生み出し、それぞれの固定観念や世界を広げ、生活を豊かなものにしてくれるとともに、個々の違いや存在が対等に認められ誰もが生きやすい社会形成につながるものだと改めて実感する事業だった。今回の事業で十分ではなかった鑑賞支援など反省点を踏まえ、今後も事業に取り組んでいきたい。

事例紹介 徳島県

K さん

徳島県障がい者芸術・文化活動支援センターの事例紹介

Kさんは、1990年生まれの31歳。ダウン症。地元の小学校・中学校を卒業後、県立の支援学校高等部に入学。卒業後は、障害者支援施設に通所している。幼い頃は、文字に強い関心を持ち、よく漢字を書いていた。

事例経過

通所している施設では、機織班に所属し「さをり織り」の作品を制作しているが、施設の絵画教室の指導者に、フェルトペンを使った作品制作を勧められ取り組むようになった。

しかし、週1回の教室では制作が捗らなかったため、自宅で作品を制作するようになる。初めて取り組んだ作品が、第1回「障がい者アーティストの卵発掘展」において金賞を受賞したことをきっかけに、さらに熱心に取り組むようになった。

取り組みの内容

当センターが企画した、「障がい者アート」を紹介する展覧会にも足を運び刺激を受けているようで、表現材料にもこだわりを持つようになった。また、自分で時間を見つけ作品制作を行うようになり、生活にリズムが生まれてきている。

まとめ・今後の展望

作品制作が、生活の中心になっており、それで自主性が育っていると思われる。今後も制作活動を見守るとともに、発表の機会をいろいろな場所で、提供していきたい。

事例紹介 島根県

Fさんは現在54歳です。46歳の時に発達障害（アスペルガー症候群）の診断を受けました。今は、障がい者雇用枠でフルタイムで働いており、事務職をしています。

事例経過

社会生活を送る上で最も困難と感じる点は、対人関係の難しさです。過去に、対人関係の不器用さが原因で、二次障がい（うつ）にもなり、うつで障がい者手帳を取得しました。現在は、うつは緩解しています。

日中働いているので、本来やりたいこと（芸術活動）に充てられる時間やエネルギーが限られ、作品を発表する機会もほとんどなく、日々悶々としていました。自分の創作（消しゴムはんこ）の方向性にも自信が持てませんでした。

Fさん

島根県障がい者文化芸術活動支援センター
アートベースしまねいろの事例紹介

取り組みの内容

「江津市障がい児・者アート作品展」に出品することで発表意欲が高まり、自分で消しゴムはんこを販売する経験を行いました。続いて「小さな世界展」（石正美術館）、「島根県障がい者アート作品展」と続けて出品を行います。

障がい者アート作品展では優秀賞を受賞し、創作活動にも自信を得ることができました。今年度はWEB上で作品を展示したので、周囲へのアピールにもなりました。今回の経験を通して、Fさんはやはり「絵」を描きたいのだということを自分自身、強く再認識することができました。

まとめ・今後の展望

生活の一部に創作活動があることで、「生きづらさ」を乗り越えています。Fさんはアートで日々の辛さを乗り越えられる人を増やす活動（消しゴムはんこの指導等）を通した社会貢献をしたいと考えています。

将来的にはアートで生活が成り立つように、創作活動を頑張り、「消しゴムはんこで絵を描くこと」の可能性をもっと追求したいと感じています。夢は、障がい者が生き生きと働いて収入も十分に得られる「工房」をつくることです。支援センターも必要に応じて今後も寄り添っていきたいと感じています。

現場を巡る対談

島根 渉 秀之（島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ）

徳島 西木 正（徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター）

高知 松本 志帆子（藁工ミュージアム分室）

聞き手 土谷 享（中国・四国アール・ブリュットサポートセンターパスレル）
岡村 忠弘（中国・四国アール・ブリュットサポートセンターパスレル）

高知県の事例

――藁工ミュージアムの松本さんから順番に事例を報告していってもらえたらなと思います。よろしくお願いします。

松本　2021年の夏に演劇公演を行ったんですけれども、その出演者と、出演者だけではなく関わったスタッフや、音楽劇だったのでその際のミュージシャンの方とかの変化というものを事例として紹介させていただきたいと思って報告書にあげました（➡30ページ）。

この演劇公演は本来は一昨年の2020年2月に公募をしてその夏に上演する予定だったんですが、公募を終了した直後にコロナ禍になり中止せざるをえないという判断になって、1年以上にわたり出演者が離れていかないようになんとかオンラインとかで稽古を続け、ようやく本番を迎えました。

出演者の中には身体障害とか目に見える障害のある方もいたんですけれども、聴覚に障害がある方もいましたし、病気で本当は片方の耳が聞こえないけれども自分は障害者だと言っていない方や、弱視の方だったり、手帳は持っていないグレーな配慮の必要な方もいましたし、妊娠と出産を経て公演に出演するという方もいたり、サポーターも含めとにかく色んな人がいらっしゃいました。

当初スタッフとして関わっている演出家だったり俳優というのはどうしても障害のある方のサポートをする、支援をする人というイメージで関わっていたんですが、作品を作っていく中で、スタッフの方が障害のある方に支えられていると後になって気づくということが多々あったり、聴覚に障害のある方が音のきっかけがわからないのをどう解決するのかということをミュージシャンの方も一緒に考えたりとか、そういう本当に対等な関係性というのが演劇公演を通じて生まれていたと思いました。また、障害のある方というよりは健常者の方が大きな気づきがあることが多くて、自分たちの考え方を変えていかなければいけないんだな、というような内面的な変化があったので、それを事例経過として書いた次第です。

この舞台を通じて、ふだん福祉事業所や学校の友達としか出会わない障害のある方たちが、今まで出会ったことのない属性の人たちに出会うことができ、新しい日常を開くことができました。

たとえば、障害のある出演者の中に100円ショップの「ダイソー」をよく利用する方がいたんですが、その方は「セリア」は知らなかったんですね。演劇の小道具を探していた時に、別の出演者の人が「それ、セリアにありましたよ」と言ったところ「セリアってなんですか」という話になり、その方は以来セリアによく行くようになったそうなんです。また、

身体に障害があると着物を着るというのはなかなかハードルが高かったんですが、着物がとても好きなスタッフが「大丈夫大丈夫、簡単に着られるから」と簡単にできる着方を一緒にやる会を公演終了後にやったりとかもしました。

小さいことかも知れないけれど、そういったところから行動範囲が広がっていったり、交流が自発的に生み出されていって、しかもそれが舞台が終わった今も定期的に続いていて、彼らの日常の世界がぐっと広がっていったんです。日常の行動範囲や交流が広がるということは、イコール生活が豊かになるとか、その人の人生が広がるということ、豊かになるということなので、この事業は大切な事業だなと改めて思いました。

——1事例だけではなくて、この事業を通して変わった支援者やスタッフ、障害当事者のことを変化した点として書いてくださっていたんですね。この事例にしようと決めた理由はありますか。

松本　「この事業の意義」というところにつながると思うんですけれども、私は、この事業は「障害者」という言葉はついているけれども障害者だけのための事業ではないと思うんです。世界中に生きている人がいて、しかもそれぞれみんな違うわけです。その違いをおもしろがれたり、認められたら、もっと生きやすい社会につながるんじゃないかと思います。それをまずは障害のある方から取り組んでいこうというのが、障害者芸術文化活動の意義でおもしろさなのではないかなと思うんですね。

なので、先ほど話した障害者の方の事例だけではなく、障害のある人の変化が別の健常者といわれる人の変化にも繋がっているということと、障害者という手帳を持っている人だけに特化するのではなく、手帳を持っていないグレーの方って本当に世の中にたくさんいると思うんですね。だからそういう人たちも一緒に巻き込んでいくというか、そういうことがこの事例で伝えられたらいいなと思って、具体的な固有名詞とかはないんですけれども、書いた次第です。

——言葉にするのは簡単なんですけど、昨今いわれている共生社会の縮図が松本さんの報告の中にはある。無理矢理ではない、誰しもが温かい共生社会というものがあるなあと思って聞かせていただきました。

僕ばっかり質問するのもあれなんですが、これは最終的にはお互いが配慮しつつ気づき始めたみなさんがいると思うんですけど、これはその舞台演劇だからこそ気づけたみたいなものがあるのか、これがたとえば別にスポーツイベントでも良いのかとか、松本さんどう思いますか？ アートだからこそ繋がっていったというか。

松本　舞台芸術だからこそだと思いますね。スポーツは勝負になってしまうんですが、舞台芸術は競争ではないんです。演劇には、まず舞台に立つ俳優さんがいる。だけど、それを作るためには演出家や脚本家もいて、大道具や小道具を作る人もいなければいけない。さらには、舞台の動線を考える舞台監督、ミュージシャン、照明、その他いろいろな人が関わっている…というのがすごく大きいんじゃないかなと思います。美術は美術でもちろんまた良さがあるわけですが、今回は演劇作品だったからこそ、それぞれが歩み寄るというか。すごくしんどくて、もうお芝居は二度と嫌だという人もいるんですけれども、現場は楽しかった、だから終わってからも交流が続くという、不思議な世界ですね。

——広島の保田さんが出してくれた事例（➡22ページ）で、車椅子で生活されていた方が舞台演劇をやってみたら、目標にしていた一人暮らしを始めたというものがありました。

もし僕らが舞台演劇をするとして、たとえば僕に役が与えられたとしたら、やっぱり最初はちょっと恥ずかしかったり、声がうまく出なかったりすると思うんです。でも、そこを乗り越えた時にもう一つの自分がうまれるというか、なにかそういう力のようなものが舞台芸術にはあるのかなと思いました。

確かにスポーツは個々に競い合うみたいなところがあるんですが、そういうところではなくて、舞台は支え合う、そして一歩踏み出させるような力があるんでしょうかね。

渉さんはいかがですか？

渉　いま、島根県内で演劇の方たちとのネットワークがあるかというと私自身にはないんですね。もし島根県でも舞台演劇を考えた企画をやろうと思った時に、ネットワークがゼロなわけです。広島の保田さんにしても、藁工ミュージアムさんにしても演劇ということは背景にもともとそのような要素、ネットワークがあって企画されたものなんでしょうか？

松本　藁工ミュージアムの場合は、同じ敷地内に別のNPOが運営する「蛸蔵」という多目的ホールがあって、そこには演劇活動をしている人たちがいたんですね。ミュージアムが開館してから10年くらいたっているんですが、その前から演劇の活動をしている方たちはもう20年以上活動していて、ミュージアムは蛸蔵よりずっと新参者なんです。だから、まずは演劇の人たちと仲良くならないとなと思って、演劇公演があったら必ず観に行ってまず顔を覚えてもらうということをしていました。

この普及支援事業が始まった時、最初は美術から始めたんですが、せっかく同じ場所に演劇をしている人たちがいるわけだからその人達と一緒にこの事業をやっていけば美術と舞台芸術を混ぜることができると思いましたし、アートの中でも分野が違うと交流が一切なかったりもするので、そういったネットワークというか交流の幅を広げていけば、どんどん世界が豊かになるだろうなと考えて、蛸蔵の演劇をしている人たちに相談をするようになりました。

この演劇公演自体は5年くらいかけて実施しました。一番最初は、演劇の人たちも障害のある人たちと日常的に接したことがない。そもそも一緒にお芝居ができるんだろうかという不安もあるし、知らないものと一緒に何かをするというのもけっこう怖い。いきなりおもしろい!とは思えないので、最初は盲学校とか聾学校に行って演劇の手法を使って遊ぶワークショップをしてもらえませんか?というところから始めて、鳥取県にある「鳥の劇場」の中島諒人さんにじゆう劇場の話を聞いたり、埼玉県の「キラリ☆ふじみ」という劇場で芸術監督をしていた多田淳之介さんから学んだり、2〜3年かけて演劇の人たちと一緒に学びながら演劇公演をしようと進めていきました。

たぶん広島の人たちもやろう!といっていきなりやったのではなく、徐々に計画を立てて1年目はこれやって、2年目はこれやって、というふうにやってきたから今も続いているんじゃないかと思います。

渉　ありがとうございます。思い切って3年、4年と時間をかけながら、舞台演劇にも関心を持つのも大切ですね。

——西木さんはいかがですか？

西木　センターも最初は美術から取り組んでいきまして、2年目、3年目でしたかね、舞台芸術もということで、徳島の伝統芸能、阿波おどりをみんなでやるというようなことを開いたりとか、そんなことを取り組んでいたんですが、コロナ禍でなかなか新しいことができなくなってしまいました。

それで今年度、徳島県文化振興財団から声をかけていただいて、何年かの計画でリージョナルシアター事業を取り組んでいこうとしているところです。

ご指導いただくのは北九州出身の有門正太郎さんという方なんですが、この方とも先日お会いして打ち合わせをしたり、施設を見学したりしていまして、ゆっくり進めていけたらいいなという話をしていたところです。

今年1年間で何らかの成果を得るというものではなくて、藁工ミュージアムのように細く長く続けていって何かを見つけていけたらいいなと言うようなスタンスでやっていきたいと思っています。

——土谷さんはこの事例を通しての話はありませんか？

土谷　はい、素晴らしい話で。僕もその、演劇人が縦割りできちっきちっと役割が決まっているという良さと、そこでの組織としての固さがあって、僕は苦手な世界なんですけども、こういった外界というか今まで関わっていなかった障害者手帳を持っているような人たちとか、社会の中でなにか課題を抱えている人たちと一緒に取り組むという、お互いに新しさへ踏み出すことによって、その演劇の良さっていうのは豊かさに変わっていく素晴らしい事例だなと思いました。

——うち（脳損傷友の会高知青い空）にはB型事業所があるんですが、問題行動のある方をB型事業所の枠にはめてしまいがちなところがあるんですよね。「〜したらだめだよ」とか「〜しないようにしましょう」と言ってしまう事が多くて、その方たちにスポットライトが当てられることが少ないわけです。

でも、演劇をやれば、役をもらったりしてその方に注目が集まったり輝く瞬間があったりするわけで、うちの事業所でも演劇のテイストを取り込んで、そういう感覚を得る機会を利用者さんにも持ってもらいたいという気持ちが生まれつつあります。

簡単に言えばうちの事業所で舞台演劇を取り組んでみようよとか、舞台演劇が持つ役割、意義みたいなものをもう少し日常生活に拡大解釈をしたりして活かせないかなと思っています。

松本　人間って、日常生活の中で「演じて」いると思うんですね。職場で働いているときの私と家でいるときの私は、やっぱり違います。それは演じ分けているわけではなく、自然と切り替えられているんですけど。

岡山県で活動している菅原直樹さんという演劇の方がいて、「OiBokkeShi(オイボッケシ)」という名前で活動しているんですけど、「OiBokkeShi」というのは、「老い」と「ボケ」と「死」のことで、90歳を超えたおじいちゃんと二人でお芝居をやっています。

菅原さんご自身は介護福祉士で、介護の仕事をしながら演劇をやってらっしゃいます。介護で認知症の方と対峙したりする時に日常で切り替えているというものを応用していくと介護をする人もされる人も生きやすくなるんじゃないか、というのをワークショップでやったりしているんですが、事業所の中でけっこう活用できるんだろうなと思って。菅原さんのワークショップを一回職員の方が受けるだけでも変わるかもしれませんし、「今日はこれをやりきる人ね」って演じていくと、職員の人も、働く利用者の人もその日一日楽しく過ごせていいかもしれないなと思いました。

——演じることで生活の中とか支援の中に組み込んでいければ、さまざまな感情も消化できるんじゃないかと、舞台演劇にはそんな力があるんじゃないかなと思いました。ありがとうございます。

徳島県の事例

――次に、徳島県障がい者芸術・文化活動支援センターの西木さん、お願いいたします。

西木　Kさん（➡31ページ）という31歳の女性です。彼女は地元の小中学校を卒業しましてその後、支援学校の高等部を経て卒業後は地元の障害者支援施設に通所しています。

お母さんのお話では、小さい頃から文字とか数字とかに非常に強い関心を持って、よく漢字を書いていたそうです。通所施設では機織班として「さをり織り」の作品を制作しているんですが、施設の絵画教室に指導に来てくださる方がフェルトペンやマジック、サインペンをつかった作品制作をすすめるようになって、週1回だけの絵画教室の制作では自分が思ったようにできないので、自宅で制作をするようになったそうです。

そうして作った作品が、「第1回障がい者アーティストの卵発掘展」という、県が主催している今年で8回目になる県内で障害のある方の公募展なんです。第3回まで県が主催で、第4回からうちが引き継いだんですが、その第1回で金賞を受賞したことをきっかけに、気持ちに火がついたというか、熱心に取り組まれるようになりました。

センターが企画している障がい者アートを紹介する展覧会、これも具体的には「やまなみ工房」の展覧会だったんですが、ここにも見に来られて、たくさんの利用者さんが制作している様子を作品展の会場でライブでやってもらったんですね。

すると、それを見てから表現が非常に変わってきて、表現材料に強くこだわりを持つようになったんです。今までは保護者の方、お母さんが「するで」って言ってやっていたんですけれども、自分でその制作の時間を作って作品を自主的に作るようになって、生活にリズムが生まれてきたと。これはお母さんからの話なんですけれども。

作品制作が生活の中心になっていて、それが自主性を育てているんじゃないかなあということをお母さんは話されていましたし、今後は発表の機会をセンターでも作っていきたいと思っています。

この報告のときには実現していなかったんですが、その後4月の下旬から当センターが入っている県立障がい者交流プラザのギャラリーでこの方の展覧会を開催しておりまして、たくさんの方に見に来ていただいています。

ご本人もこのギャラリーまで自宅から2時間近くあるんですけれども、ご家族の方と一緒に来られたり、あるいはご近所の方が見たいということで、社協のマイクロバスを借りて十数人で見に来ていただいたりしています。地域の方もこんなことしているとは知らなくて、「よう頑張っとんなぁ」と言ってくれたりして、本人も気持ちが良いっていうんでしょうかね、とても満足した様子です。

以前はあまり妹さんのことをよく言わなかったのが、お兄ちゃんが最近は褒めてくれるようになったよ、など家族の関係も非常に良くなったとお母さんも話ししていて、ご本人だけでなくて、周りの方が変わってくるといいますか、生活自体が変わっていったという事例かなと思います。

――ありがとうございます。社協のバスまで動かしてというところに、この方自身が地域で愛されていること、地域のみんなから目をかけてもらっているような印象を持ちましたけれども、この事例を選んだ理由は、やっぱり「変わってきた」ということですか？

西木　そうですね、最初に作品を発表したのが、今センターが主催をしている公募展なのですが、以降もずっと展覧会に応募してくださっています。作品もたくさん作られていますし、受賞歴もたくさんあります。

作品調査でお家にお伺いしたときも、お母さんは「この子が将来1日をどんなふうに暮らしていったらいいのかととても心配していましたが、こういう作品制作を本人が続けられること、こういったことを本人が見つけたことで安心しました。これから生活していく上で、本人が打ち込むことができることができたことが非常にうれしい」というふうに言われていましたね。

――ありがとうございます。

皆さんにお聞きしたいんですけど、この事例を出していただけませんかってお話を皆さんへお願いした時に、アートに触れ、芸術文化に触れた事例で、その際に好事例というか良くなった事例を出さないといけないなっていうバイアスはかかりましたか？

西木　個人のお付き合いといいますか、生活の中まで知っていたりとか、その方がどういう人生を歩んできたのかは多くの方の場合こちらも知らないわけですが、たまたまこの方に関しては7年前からよく知っていたので、事例としてあげさせていただきました。

いい事例を見つけたいという気持ちはありますが、逆に失敗例というのにはそこまでも関われていないかなというのが正直なところです。

渉　失敗例とまでは言いませんが今回の好事例の方とは対象的な、うまく行かなかったものも正直、いくつかはあります。

松本　事例を選ぶときのバイアスがかかったどうかについては、やはりバイアスが掛かったと思います。そもそも送っていただいた参考例が良い変化のある事例だったので、自然と良い事例を紹介する感じなのかなというのと、やっぱりこの事業をやった意義みたいなものを報告書として出すというのが報告書の目的だろうなと思ったので、やってよかったよね、という事例を紹介したいなというのはありました。

徳島の方の事例っていうのは、きっかけもすごいなと思いました。さをり織りという日中活動の中で、絵画制作っていうか、それをやってみない？って声をかけた先生っていうのがすごい。お母さんからもともと文字に興味を持っていることを聞いておられたのか、施設の中で落書きみたいにしていたのをみたのかどうかはわからないんですけど、もしかしたら本人のちょっとした動きとかを見て声をかけたのかもしれない。いずれにしても、そういう人が近くにいることが大切なんだろうなって思いました。あと、本人の努力っていうことではないんですけど、本人がそこに楽しいと思って描いていって、それがよくなるっていう、素敵な事例だなって思います。これからもうちょっとフェルトペンの種類を変えてみたり、他の興味を持つものが出てきたら、絵画制作の幅が広がっておもしろいなと思ったので、今回は観に行けないんですけれども、次回は観に行ってみたいなと思います。

土谷　西木さんたちが取り組んでいる様々な活動が素直にリレーしている、すごく感動的な事例だなと思いました。やっぱり大きな出合いって言うよりも、日常の些細な出合いっていうのが重要なんだなと思いました。ありがとうございます。

――鳥取県のあいサポートセンターさんの事例で、Yさんという女性の方を紹介（➡32ページ）いただいいたんです。そのYさんはけっこう有名な方で、本人もどんどん有名になりたいと言っているんですが、お母さんはあんまり有名になりすぎても困るので自重してほしいと言っておられるそうなんですね。

本人がどうしたいか、本人の人生は本人のものだと思います。そういった意思決定の支援とか、保護者の思いとの乖離といったところへどう介入していくべきなのか。障害者施策の中では意思決定支援ってよく出てくるんですけど、どのようなご意見をお持ちでしょうか。

松本　たとえばとある施設のメンバーの方が作る作品がすごい値段で購入されたりするんですよね。本人は作品を作ることが楽しくて作ったり書いたりしているので作品がどんな金額で売れるのかってあんまり気にしていないのですが、家族や周りの人が作品が高く売れるから、変な話、どんどん作って欲しいということになる場合があるらしいんです。でも、作品はたくさん売れると一時の収入はあるんですけど、作品ってそんなにずっと売れ続けていくかどうかわからないものですし、先の見通しが立ちにくい要素もあると思います。だから、ある意味作り手本人の今後のことを考えると、売れるからどんどん売るっていうものではなくて、月々にいくらっていう、障害者年金ももらえる範囲の中で売っていくっていうことをその施設では考えてやっていらっしゃるそうなんです。そういう機能でいうと、支援センターが間に入ってやっていくのが大切なんだろうなと。直接相談されたわけではないんですが、これからそういう事例の活動が活発になればなるほど出てくるんじゃないかなと思いますね。これから先、結構考えていかないといけない問題だろうと思います。

――Kさんの事例では、お母さんもご兄弟も生活リズムができてよかった、絵と出会えてよかったということで、ご家族も制作活動を後押ししてくれていると思うんですが、何らかのきっかけで有名になりすぎて困ったとか、フェルトペンを大量に使いすぎて家計を圧迫してるから困ったとか、本人はやりたいと思っているんだけど障害者年金の枠を超えてまで制作してしまうから困ったとか、この好事例が困難事例になっていく可能性もあるわけですよね。そういったときに本人の意思決定をどう支えていくのかということも本当に考えさせられるなと思います。

そういうときに支援センターなり広域センターでその方やご家族を守るというシステムを構築できればいいですね。

西木　私個人的には、「美術芸術と関わり合うことで本人が過ごしやすい」ということが理想だと思うので、作品の収入というのはプラスアルファくらいに考えておいたほうがいいかなと思っています。

ご自分で絵本を作り、その読みきかせもボランティアでやられている障害のある方がいるとした場合、その方を講師としてワークショップなどにお呼びすると謝金が発生するわけです。だけど、その絵本を作っているのは施設にいる時間の中で作っているわけで、そうなると謝金はご本人に全額支払うべきなのか、施設を通して支払うべきなのか、といったような微妙な問題も発生してきます。

そういった問題についてもしっかりとサポートができると一番いいわけですが、保護者の人は心配していますね。

そういう身近な、大した金額ではないんですけども、こちらも事業所さんにお支払いすべきなのか、ご本人にお支払いすべきなのか。保護者の方に直接出演依頼をするのかとか、事業所を通して出演依頼をするのかとか、そのへんとかみなさんどうされているんですかね。

――今、香川県の支援センターさんと香川県庁の方から、障害をお持ちの方にある会社の包装紙をデザインしてもらいたいのだが、どういうふうに進めていったら良いかという相談を受けているんですね。利用者さんとの間でマージンをどう

いう風にお渡しするのかも考えていかないといけませんし、契約をどのように進めていくのか、いろいろ考えるポイントがある。こういった事例は挙げだしたらキリがないんですけれども、この中国・四国ブロックでもこのような議題をみんなで共有できるような、研修会を開催してもいいですね。

土谷　障害の有無に関わらず、アートにつきまとう問題なんだと思うんですよね。お金っていうのは惑わせたり狂わせたりしてしまうものでもありますので、その扱い方とか受け取り方っていうのは何らかの形で整備していくべきかなと思います。

おそらく個人で、公的支援の中で制作して個人で販売していくということの交通整理も必要ですし、あるいは自宅で制作したものを販売したときには青色申告もしないといけない。個人事業主としての登録を税務署にしたりとか、そういったところの手助けはできると思うんですけども、ただ家族のマインドセットとか、そういった部分に関しては非常に難しい問題だと思いますね。アートに関わらず、たとえば普通に家族の中で親がここの学校に進学してほしいといっても子どもはこっちの学校に進学したいといったり、そういったところでも同質の悩みっていうのは出てくるわけで。

やっぱりその当事者が家族以外の社会の構成員に何らかの形で、親しい形で支えられていくという状況づくりが必要なのかなと思いますね。信頼できる人がまわりにどれだけ関われているかっていう、そういう関係性づくりっていうのを作っていければいいのかなって思います。

まあ非常に先は長い話だとは思うんですけど、支援としてはそういったことしかできないのかなと思います。

島根県の事例

——そういった場面での支援というのはなかなか難しくって、長期的なスパンで関わっていくということが本当の支援なのかなって思いました。この事例も勉強になりました。

では最後に、島根県の事例を報告いただきます。

渉　Fさんの事例（➡32ページ）を紹介します。この方は私たちと同じ社会福祉法人が運営している「障害者就業・生活支援センター」に消しゴムはんこを上手に作る人がいるよということで、2年くらい前に出会った方です。

書いてあるとおり46歳の時に発達障害、アスペルガー症候群の診断を受けた方で、今は障害者雇用枠でフルタイムの事務職をしておられます。社会生活を送る上では対人関係の難しさを感じているということで、二次障害で鬱にもなって、手帳を取得している状況です。

一方で昔から絵を描くことが好きだったようで、作品はあるんだけれども発表する機会がなく悶々としていたそうです。消しゴムはんこもやり始めたんですけれども、いまいち方向性に自信が持てなかったと。日中働いてもいるので、本当は芸術活動をもっとやりたいんだけれども、時間やエネルギーも限られている、という状態だったそうなんです。

そういったところ、私たちが企画していた「江津市障がい児・者アート作品展」についての情報をこのFさんに提供したところ、一度発表・展示をしてみたい、同時に消しゴムはんこを販売する経験もしてみたいということで参加いただいたんです。

また、僕たち支援センターが島根県と企画している「障がい者アート作品展」にも続けて出品をされました。この作品展では見事優秀賞を受賞され、その後Fさんの中で自信を得ることができました。令和3年度はwebで作品展を展示したものですから、周囲の方々へのアピールになりましたということで、Fさん自身は今回の経験を通して、自分自身はやはり絵を描きたいのだと強く認識したそうです。

今後の展望とすれば、生活の一部に創作活動があることで、生きづらさを乗り越えていく活動をしていきたいなということで、消しゴムはんこのワークショップの指導をしてみたいなど、だんだんと夢が膨らんでいます。消しゴムはんこで絵を描くこともさらに追求して、将来工房を作るとか、収入を得られるような夢も描いているということでした。

——ありがとうございます。46歳までアスペルガーで大変しんどい生活を送られてきて、鬱にもなって、大変しんどかったんだろうなと思いますが、消しゴムはんこがこの方の安全基地というか、よりどころになったんですね。消しゴムはんこ以外には何か作っておられるんですか?

渉　もともと絵とかイラストを描くのが上手な方なので、それが今は消しゴムはんこを通して表現するという形ですね。Fさんはインスタグラムとかもアップされていて、たくさんの方に見てもらっています。

——対人関係がすごく苦手で不器用だった人が消しゴムはんこを通じて人に教えたいとか、人と関わっていこうという気持ちに変わったきっかけは何でしょうか?

渉　江津市の「障がい児・者アート作品展」を企画した時に、作品を展示する企画とロビーのブースで福祉事業所による物品販売をやりますということを宣伝したんです。

それは福祉サービス事業所向けに宣伝したつもりだったんですが、Fさんがそれを見て販売をしてみたいけど、自分も出店ができるだろうかと相談を受けたんです。もちろんうちは大丈夫です、ぜひやってみましょうということで、実際に販売をされました。

当日はFさんのお知り合いの方とかが店に来られて、会話もされたり購入もされたりして、けっこう楽しかったと仰ってました。そこからさらにまた年月が流れて、うちの支援センターではないんですけれども、他の地域の活動団体の企画によるワークショップの講師として消しゴムはんこ講座をやるといった企画も立ち上げられたりしていました。

自分が指導者として、消しゴムはんこづくりを通して社会と関わっていきたいという姿勢がすごく出てきたなと思っています。

松本　人に対しての不安みたいなものがここまで解消されていくんですね。本人に直接話を聞いてみたいと思いました。Fさんの中で、いい作用というかいい連鎖みたいなのが起きて、これができたから次はこれやってみようというふうに自分の中で広がっていった様子が見えたと思いました。ネットで販売も考えられているんでしょうか?

渉　可能性としてはネットでも販売したいというのはあると思います。たくさん売れているかどうかはわかりませんが、すでにLINEのスタンプの販売もされています。

西木　人前にどんどん出ていきたいというか、そういう積極性が出てきたことはいいことですよね。ひとつ自信を持つと、どんどん変わっていける。そして、それを周りの人が心配せずにどんどんサポートしていける体制がいいなと思いました。

土谷　本人が作品発表だけではなくてワークショップとか自分の技術を誰かに伝えたいというのはすごいいいことだなと思いました。新しいジャンルにもどんどん進出していけそうかなっていう期待もあります。

——この事例ですが、消しゴムはんこを作って展覧会に出したから自信が持てたというのではなくて、途中の過程での渉さんとの関わりだったりとか、事業所でのみなさんの反応の変化というところが、なにかこのFさんに効果をもたらせているのではないかなと思います。

きっと消しゴムはんこ自体はずっとFさんがやってきたことなんですね。この方の行為自体はあんまり変わっていないわけですが、Fさんの思考を変えたのは、一体何だったのでしょうか?人と関わりたい、人に伝達したい、人を教えたいと変わったのは一体何だったのかなと。

渉　11月に行われた発達障害地域啓発セミナーでFさんが自身の生育歴から現在までを発表した資料を見返しているんですが、自身の発達障害と向き合って苦しんでいる時に、医療機関に図書館があったらしくて、そこの図書館の店番というか、そういったことをしていたということが書かれていたんですね。

そこでは、貸し出しする本と一緒に返却日などを記した「栞（しおり）」を自分で作って添えていたらしいのですが、そこにワンポイントとして動物を彫った消しゴムはんこを捺していたそうなんです。それでどうもその時にすてきなスタンプだねと褒められたことが心の底から嬉しかったようなんです。これが自分のやることだ、と衝撃というか衝動をうけました、と資料にもありましたので、ここがターニングポイントなのかなと思います。

——図書館のお客さんたちの声は、Fさんを「支援」しようと投げかけた言葉ではないと思うんですよね。作られた言葉ではなくて、本当に心の底からいいと思って、いいねって言ってくれた。さきほどの舞台芸術ではないんですけど、実体験の中で与えられる称賛というのが、やはりいいのだと思います。鬱病になるくらい他者との関係性で悩んでいた人が他者と関わりたいっていう変化もすごいですしね。

西木　やっぱりご本人が活躍できる場っていうか、それが持てるのが本当に素晴らしいなと思います。私どももワークショップの中でアーティストが一方的に教えるのではなく、障害のある方が逆に教えられる立場になる、そんな場が持てたらなと思います。

——障害者芸術文化活動支援普及事業の仕様書には、「発表の機会の創出」という一文が書かれています。だけど、展覧会をするとかはひとつの一手段であって、もうすこし展覧会の仕組みとかを考える時期なのかなとも思いますね。

ただ公募して展示するというのではなくて、本人が輝ける場の発表の機会の創出みたいなことができないか、中国・四国ブロックに7つの支援センターが連携して構築できたらなと思います。土谷さん、どうでしょうか?

土谷　アートセンターというのは往々にしてそういう場所だと思うんですよね。最初に発表してもらった藁工ミュージアムの事例でもそうなんですが、たとえば演劇というのは役者の他にも照明さんや美術さんなどの様々な役どころがありますよね。それで、それぞれの役どころが頑張り合わないと、最終的に劇全体が歪んでしまうという点で、それはある意味で社会の構造の縮図のようにも見えるわけです。

イギリスでは、中学校に入学すると演劇にも力を入れるそうです。社会を生きていくための知恵が詰まっているんでしょうね。日本なんかでは演劇はただの趣味だと思われてしまう傾向にあるわけですが。

たとえば、演劇においては常に「作る人」と「支える人」が必要で、その上にさらに「観る人」も必要なわけです。そういった部分を演劇というのは濃縮された形でシステマチッ

クにやられていて、その考え方は様々な方向にも応用できると思うんですよ。障害者文化芸術支援活動でもアートを「作ること」ばかりではなく、「売ること」や「支えること」、「観ること」をトータルに考えてもよいフェーズに入っているのかもしれません。つまり、障害がある方の制作を障害がない方がサポートするという構図ではなく、障害があろうがなかろうが、だれもが作る側、支える側、観る側に立つということです。

厚生労働省の事業を含め、様々なところでアート活動というのは盛んになっているわけです。それでこういった明らかに個人が変わった良い事例もたくさん見受けられている中で、今後こういったところをどう掬い取っていくかというのはフェーズを変えた議論になると思いますし、特に私たち広域支援センターというのは意識してそこを担っていかないといけない。

現場から離れて、もちろんパスレルの属する法人にも就労支援現場がありますけれども、そこから一歩引いて広域支援という視点で次のフェーズを見据えたシステムをどう構築していくのかというのは重要だと思いますね。

さきほどの消しゴムはんこの方の場合、自ら作品の情報をインスタグラムなどで発信されているということでしたが、インターネット空間も今後重要さを増してくるようにも思います。以前、パスレルにもNFTについての問い合わせが来たことがありますが、その時は何も答えられえませんでした。

以降、気にして情報には接するようにしていますが、最近得た情報では様々な障害などの理由もあって現実よりもむしろ仮想現実の中のほうが輝ける方も世界を見渡すと多くいらっしゃるようです。「メタバース」とも言うそうですが、そういった仮想空間をも含めた中でコミュニケーションを取りながら創作物も売買されていく、そういった方向も可能性の一つとして意識して取り組んでいく必要性を感じています。

——最後に皆さんにひとこと、支援者という立場からご感想を述べていただけたらと思います。

渉　さまざまな事例を興味深く聞かせていただきました。自分に置き換えて、うちの支援センターでも何か新しい発想でできることがないかと感じた座談会でした。ありがとうございました。

西木　この話をしているとどんどん話が拡がっていきますね。また皆さんの意見を伺いたいです。

松本　報告書に文字で書ききれないものがあるので、文字で見るだけではなくてこうして実際に話をさせていただくと、自分の県ではどうかなとか、たとえば、公募展がきっかけとなったいい事例を教えていただいたんですが、高知県で20年くらい行われている公募展では良くない事例も聞くので、どうやったらそういう良い事例が生み出される良い循環ができるんだろうかと考えるきっかけももらえました。今日はありがとうございました。

——ありがとうございました。本当に、みなさんが仰るとおり、話していったらどんどん広がっていって新たな課題とか、みなさんが仰るように「種」が生まれるなと思いました。こういった「種」をひとつひとつパスレルで拾い上げ、しっかり育てていきたいなと思っておりますので、またこういったみなさんと話せる機会を多くしていけたらなと思っています。

Aさん（62歳）の障がいは肢体不自由。知的障がいの重複障がいはない。Aさんが通う障害福祉サービス事業所の仲間たちの主たる障がいは知的障がいと身体障がい。Aさんは他の人が職員に幼稚園児の様に甘えているのを見て、「自分は、人に甘えずにこれまできた。私は知的障がいはない。自分は他の人とは違う。」と他の人と同じ並びにされるのを嫌がっていた。職員がどんなにアプローチしても頑なだった。また、Aさんの交友関係は少なく、本事業所と教会の仲間が主である。

事例経過

本事業所には、令和2年度より「外部指導者派遣事業」で、指導者を派遣している。令和2年度はダンスや歌を中心とした表現活動だった。Aさんは、あまり乗り気ではなかった。「作業の休憩がてらにそばで見るだけでもいい。好きな書き物をしていてもいいから」と職員が誘った。その時、外部指導者がAさんが書き溜めていた数々の文章に目をとめた。

令和3年度の本事業に引き続き参加することになり、外部指導者が「Aさんの作品で、劇を作ろう。」と提案した。

※外部指導者派遣事業　1事業所に対し年間3回指導者を派遣する。

事例紹介 愛媛県

Aさん

愛媛県障がい者アートサポートセンターの事例紹介

取り組みの内容

事業所の利用者の年齢幅が広いため、アダルトチームとヤングチームに分け、Aさん原作・外部指導者脚本の劇「おでんのけんか」「ふわふわさんともこもこくん」をそれぞれ1回ずつの練習後、発表会をした。伸び伸びと可愛く、指導者の伴奏でミュージカルのような雰囲気に仕上がった。

令和2年度は事業所の職員の本事業に対する関心が薄かったが、今年度は「演劇をする？」と、作業を止めて見学に来てくれた。Aさんは「自分の作品を演じてくれた。しらけられたらどうしようと思っていたのに、それも楽しそうに！」とそのことをとても喜んでいた。

まとめ・今後の展望

Aさんは、これまで若い子たちに教えることを「それは自分で学ぶこと」と嫌がっていたが、今回の経験を通して、困っている人に手を差し伸べるようになり、他人を認められるようになった。Aさんに自信がついたこと、何より、仲間意識を持つようになったことの成果は大きく、その要因として「外部の人に認められた」ことが考えられる。外部の指導者が入ることは、職員にとっても効果をもたらした。外部指導者の利用者さんとの関わり方やサポートの仕方を見て、「利用者さんに対して先入観や固定観念があったのではないか等、改めて考えるきっかけになった。」などの感想をもらった。今後も、サポートセンターとして文化芸術活動が何らかのきっかけ作りとなるよう支援していきたい。

現場を巡る対談

愛媛

宮本 祥恵（愛媛県障がい者アートサポートセンター）
天野 真紀子（愛媛県障がい者アートサポートセンター）
聞き手　岡村忠弘（中国・四国アール・ブリュットサポートセンターパスレル）

――事例についてご紹介いただけますか？

天野　山あいにある「パステル工房」という、主に知的障害の方が利用されている事業所におられるAさんの事例（➡42ページ）を取り上げました。

「パステル工房」には当センターが行っている外部指導者の派遣事業で舞台芸術の指導者を派遣していました。

工房には10代の方から高齢の方まで幅広い世代がおられることもあり、なかなか相互に交流が持てていないということだったので、合計3回の派遣事業の中で1回目はヤングチーム、2回目はアダルトチーム、そして最後は発表会という形で歌やパフォーマンスを披露しあいました。

Aさんは知的障害ではなく肢体不自由の方で、担当者によると「自分はみんなとは違う。みんなは指導者の方にこどものように甘えたりするけど、私はそんなことはしない。私は自分でちゃんと考えていろいろなことができる」という思いを抱いておられたのだそうです。そういうこともあり、指導員の方とは話をするけれど、なかなか周りの人たちとの交流は持てなかったし、馴染めないという状況だったんです。

一方で、Aさんは詩を書いたり、文章や物語をたくさん書き留めておられましたので、これをみんなの前で発表することができないかということを担当者や指導者が考えるようになりました。1年目はなかなかそこまで発展しなかったのですが、2年目の今年こそということで、この方の作品をミュージカルにしようという話が固まったのです。

脚本は、Aさんの物語を外部講師の方に少し手直しをいただく形で一緒につくりあげ、アダルトチーム向けに「おでんのけんか」、ヤングチーム向けに「ふわふわさんともこもこくん」という2本ができました。音楽も、講師と音楽家の方が曲をつけてくれました。

すると、自分の作品をみんながこんなふうに受け入れてくれる、一緒に感じてくれる、ということを彼女が感じたことで、彼女の心がすごく開けた感じになったんです。「自分は他人と違う」と思っていたのが、「あ、みんなは私のことをこんなふうに受け入れてくれるんだ、私もみんなと同じように人に頼ってもいいんだ」というような気持ちが指導員にも読み取れるようになって、みんなとの交流ができるようになっていったと。

自分の方から頑なに殻に閉じこもって線を引いていたはずなのに、彼女が作ったお話をみんなが楽しそうに演じてくれる。それを見て、仲間がいるっていいなといったような気持ちになってきたんだろうと思います。

この事例で一番良かったことは、Aさんが文化芸術活動を通してみんなと一緒に関わり合いがもてるようになったということだと思います。また、それを見て、支援者の方々が利用者の方を見る目も変わった。どこか固定観念で彼女たちはこうなんだ、ああなんだと思っていたけれども、いやい

や、こういう違う面があったんだということを知ったんです。
　たとえば劇の練習をする中で、いろいろと大きな声が出たり、大きな声で歌ったり、大きな動きをしたり、というような様子を見て、作業等の場面だけでは見えてこなかった彼女彼らの表現の力とかを知ることができたりして、指導者にとっても、彼女彼らにとっても、互いに良い結果になったというわけです。

――この事例の今後についてもお話しいただけますか?
宮本　今年度から愛媛県で舞台芸術のワークショップも事業として行うことになったのですが、採択された事業者が先ほどの外部講師の方が参加されているところだったんですね。
　前日、そちらの企画提案書を拝見したのですが、その舞台のもとになる脚本というのがこのAさんの作品なんです。これは、Aさんが達成感や満足感を感じ、みんなに表現してもらう喜びも感じられたので、彼女も了解したのだと思いますし、やってみようということになったんだと思います。

――舞台演劇を通じてご本人さんの心も開いていったし、支援者も変わっていった、良い事例だと思います。
**　これは他の支援センターの皆さんにもお聞きしたんですけれども、「良くなったという事例を出そう」というバイアスみたいなものはかかっていました?**
天野　そうですね、やっぱりそれはあると思います。

――良い事例を集めるのは、障害者芸術文化活動支援普及事業にとって意義のあることだと思います。障害福祉サービスの事業所に関わっている者として、この事業の意義というのは、展覧会をするということだけではなくて、素晴らしいアール・ブリュット作品を見出すことだけでもなくて、障害当事者や家族、支援者に何らかの変容をもたらすことが最終目標ではないかなと思っています。この事例も、切り口を脚本と演じ手という形に変えて体現されたものだと思いました。
**　県のワークショップでAさんの脚本が選ばれたということなんですが、この脚本の権利とかはどうなるんでしょうか。事業者とAさんとの間で契約書というか、とりきめのようなものは交わしているんですか?**
天野　権利の話とかはこれからのことですね。

――こういった事例も少しずつ増えてきているのかなと思いますので、いずれ「権利」についての研修会もできたらいいですね。
宮本　今年度、広島県から弁護士の方に来ていただいて、権利擁護の研修会を予定しています。

――話は変わりますが、たとえば引きこもっていた人が舞台芸術に関わることで再び一人暮らしをやってみようと思うようになったりとか、舞台芸術のもつ力というものを本事例でも他県の事例でも強く感じたんです。
**　ただ単に発表の機会の場というだけではなく、舞台芸術をすることで当事者の方を変えていくような効果みたいなものは感じますか?**
天野　はい、今回の公演の発表会が2022年12月25日にあるのですが、そこまでの過程・・・たとえばワークショップなどがいちばん大事なことだと思います。
　障害のあるなしに関わらず、ワークショップにボランティアとして、演技者として参加してもらいながら、いろいろな人が交流をすることで、すこしでも自分を開放していければいいなと思います。

宮本　本事業の意義は、「人と人がつながること」だと思うんですね。ひとりひとりの方の生き方とか生きがいであるとかそういうふうなもの、それぞれの求めているものをこちらが追求してあげることができればと思います。そのための場として、舞台芸術やワークショップはとても有効に働きやすい媒体なのではないかなと思っています。

――Aさんは自分は知的障がい者ではないんだ、私はこの人たちと違うんだ、という思いがあって、その考えもAさんの生き様だと思うんですが、私たちはAさんのそういった考え方をどこかで問題行動と捉えがちなんですね。
**　でも、芸術文化や舞台芸術というのは、そういった生き様にスポットライトを当てやすくしてくれると思うんです。Aさん本人は舞台を通して輝いている知的障害者の人を見ただろうし、自分の作品を喜んで白けずに演じてくれたことに嬉しさを感じたとかもあると思います。そういったことを身近に感じれる仕組みづくりというのがアートにはあるのかなと。**
**　本人も喜んでいて、周りの方も喜んでいてというのは具体的にどういうふうに変わっていったんですかね。**
天野　自分たちが日常の生活の中で一方的に決めつけていたことが、この人たちはこういう力もあったんだ、じゃあこういうアプローチをしたらもっと変わるんじゃないか、というような、利用者さんに対する支援の仕方／評価の仕方が変わってきたというのは聞いていますね。

――ちなみに天野さんはその舞台を見に行ったんですか?
天野　私は当日行けなかったのでYou Tubeで見ました。
　それぞれ1回しか練習してないんですよ。3回しか派遣がなかったので、アダルトチーム1回、ヤングチーム1回、ワークショップ1回という。
　でも、練習しているときに事業所にお邪魔したことがあるのですが、普段の様子とは違って、最初皆さん恥ずかしそうにされているのが、だんだん声が出て、からだが動いて、自分たちでアイデアを出して、というふうに聞いていたので、それがすごく、1回2時間の練習ではあったんですけれども、良かったと聞いています。

――舞台をやるのって絶対恥ずかしいじゃないですか。
**　たとえばこの3人、天野さん、宮本さんと僕で舞台をやらないといけないってなった時に、最初声も出にくい。天野さんどうですか、いきなりだせますか?**
天野　無理・・・(笑)

――恥ずかしいけど、やっぱりちょっとずつ慣れていったりとか、宮本さんが声を出してるのを見て俺も出さないといけないとか、天野さんに引っ張られて身振り手振りもすごく大きくなったりとか、変わっていくわけですよね。その変化のスパンがすごく短くて、なおかつみんなから拍手を浴びて良かったねと称賛を受けることができるというのは、障害の当事者としてはとても嬉しいんじゃないでしょうかね。
**　スポットライトを受けて主役になるなんていうことは、なかなか大人になってからはないことですよね。そういうことの効果みたいなものをなにかうまく示せられたらなと思うんですがいかがですか?**
宮本　はい、実は愛媛県では特別支援学校でも何件かこういうミュージカルの取り組みをしていたんですね。
　今年はある学校が、その次は違う学校が、というふうにやっていたんですけど、偶然なのですが、今回の舞台芸術に関わってくれている会社の人たちがそのミュージカルにも携わっていたんです。
　その時、私たちから見たらどうしても主役級には入らないだろう、という子たちを主役級に抜擢してくれたりとか、思わぬ能力を発揮してすごい演技をしたりする子が出てきたりするんですよ。本当に何回かやっていくうちに子どもたちが変わっていって、それにボランティアとして関わっていた高校生もどんどん変わっていくんですね。そういうのを見せてもらっていると、この舞台芸術の面白さを感じます。

――舞台演劇をもっと、障害当事者がやっている舞台演劇を見に行きたいなと思いましたね。天野さん、宮本さん、お忙しいところ、座談会にご参加いただきありがとうございました。

ビデオ・プリゼント
「イマココ」を発信できる、ビデオ技術を届けます

主催：中国・四国 Artbrut Support Center passerelle
企画：山口情報芸術センター［YCAM］

令和3年度になっても私たちはコロナ禍を経験している只中に居り、従来型の発表形態そのものが、むしろ社会へ伝えていく形態として適していないこともあるという前提も、パスレルとしては考えはじめていました。そこで山口情報芸術センター(YCAM)の会田大也さんにプロジェクトディレクターを依頼し、インターネットとスマートフォンの普及によって身近になった情報伝達デザイン技術を利用した日常を記録、編集、発信する技術を障害のある方やその支援者の方々に届けることを考えました。つまり、福祉施設や福祉事業者、また障害当事者や一緒に暮らす人を対象に、会田さんや YCAM の技術スタッフが直接伝えに行きますという内容です。日常編集の実践機会を身近に引き寄せることで、身の周りの些細な自己表現や行動や行為が、実は創造的な産物であるという気づきに一歩近づく事ができるでしょう。また身近な方法で発信することが出来れば、これは社会参加の機会を引き寄せる入り口にもなります。

そういう理由で仕掛けた今回の企画ですが、制作された映像を見てみると「なんでここに注目したの？」「どうしてこれが気になったの？」という仕掛けた側の我々の想像を超えた作品ばかりで、ワクワク感と同時に障害当事者と関わる時のヒントをもらった感覚になりました。おそらく、制作に並走している会田さんのエデュケーターの手腕も発揮されながら、会田さん自身も驚きや発見の中に居るのです。

当法人は障害福祉サービス事業所を運営し、障害のある方の支援に携わっています。私たちは、普段の現場での支援において、支援する側と支援される側に分かれるのではなく、両者の間には共生社会という対等な立場が存在するという考えのもと支援を行っています。こちらが支援しているつもりでも障害当事者からの感謝の言葉で心が温まったり、逆に励まされたりとこちらがホッコリとする場面があります。

まさに、ビデオ・プリゼントの企画と障害福祉の現場は「技術を手渡す側・手渡される側」、「支援する側・される側」というような一方通行の関係ではない、お互いの学びの場がそこにあると思います。そんなことを再認識させてくれた企画です。今回の気付きを大切に、今後、映像編集技術が福祉の現場等にも気軽に取り入れられるようにパスレルとしても継続して考えていく予定です。

パスレルセンター長　岡村忠弘

video-present.tumblr.com

ビデオ・プリゼントの取組みについて

企画担当:山口情報芸術センター　会田大也

ビデオ・プリゼントは、山口情報芸術センター［YCAM］で2021年～2022年にかけて行われた映像ワークショップです[1]。まずはじめに発達障害や自閉症についての啓発普及活動を行っている団体などへお伺いし、映像の撮影や編集といったテクニックを当事者や保護者、また通所施設のスタッフなどへと手渡していくという企画内容を説明しました。その結果、賛同してくれた方々のサポートを得て各参加者へとコンタクトし、ワークショップを実施することができました。結果として10を超える映像作品が完成し、特設ウェブサイトがつくられたという訳です。

実は、こうした取り組みの礎には、過去のある活動があります。それは2010年度に美術家である藤井光さんを招聘して実施した「meet the artist 2010」という長期ワークショップです。約1年間の活動期間中、公募で集まった市民コラボレーターが各々映像作品を作り上げ、その成果として「自分たちのメディアを創る映像祭」というイベントを実施しました。活動の中で藤井さんは「プロっぽい映像を目指すのではなく、日常の文房具としての映像メディアを使って、市民目線の映像作りに挑戦しよう」とメッセージを発していたように思います。当時の参加者には、映像を趣味として楽しむ人だけでなく、例えば自分の生い立ちを振り返る映像を作る人や、障害のある人たちの日常に寄り添う日記やメモのような作品を作る人もいました。活動や成果としては実験的でありつつ、映像の可能性を拡げる取り組みでもありました。こうした背景の中、今回も実験的な活動を中心に置くYCAM が、そうした取り組みの元に社会応用的な活動として展開したプログラムが今回の取り組みです。

さて、今回のワークショップの手順は、特設サイトにも掲載しています通り、大まかには以下の手順で進められました。

1. イントロダクション
2. カメラと三脚の使い方の説明
3. 散歩しながら撮影
4. 編集作業
5. 作品タイトルや説明を考える

イントロダクションでは参加者に対し、約130年前に登場したリュミエール兄弟[2]の制作した映像を紹介しながら「凝った技術がなくても、据え置きのカメラでただ対象を撮るだけで、充分に作品になり得る」ということを伝えました。その後、三脚やカメラの使い方を説明してから散歩に出かけ、いわゆるロケ撮影を楽しみました。撮影から帰ると、講師が手伝いながら編集したり、または本人の希望に応じ、編集ソフトの使い方をその場で教え、自分なりに編集作業をしてもらいました。最後にタイトルや説明を考えて、作品は完成です。

特設サイトに掲載されている映像作品は、我々が映画やテレビなどで目にする映像とは少し異なります。実は130年余りの映像の歴史において、映画やテレビなどで培われていった暗黙のルール、映像言語といわれる「お約束」が数多く生まれました。例えばニュース映像などの「短時間で効率的に誤解なく伝えるための映像形式」のように、私たちは日々形式に則った映像を繰り返し見ています。ですから、そうしたルールが観る側の目にもいつのまにか染みついている可能性があります。しかし実は映像を撮影するという行為には、本来もっと自由な、撮影者の興味や関心がそのまま現れるような、いわば心の鏡のような振る舞いが含まれているのです。それは例えば、私たちが幼い頃に庭の虫や葉っぱなどに、目を輝かせて興味・関心を抱いていた時期の眼差しと重なります。人間が社会に順応していく過程では、分かっているつもりになって対象をよく観察しないというようなことが起きるかもしれません。今、目の前にある対象をまるで初めて目にした時のようにジッと見つめ、次にどんなことが起きるんだろう?とワクワクしながら眺める。見えている風景の中から、人工物も自然物も人間もすべて等価に見なし、自分の興味のあるものに素直にカメラを向ける。今回撮影された映像の中にはそうした視点がいくつも見つかるように思います。

今回発表された映像を眺めながら「撮影者は何に着目しているんだろう」「なぜこのカットとこのカットを繋げたんだろう」などと考えてみると、参加者たちが普段見ている風景に少しだけ近づけるような気持ちになります。例として私がワンダさん[3]と一緒に山口市内のサッカースタジアムを撮影していた際に、彼が突然ガラスにとまっている虫にフォーカスを合わせたことがありました。それまで無人のスタジアムの荘厳さに惹かれていたようなコメントをしながら撮影していたのに、次の瞬間には小さな小さな虫に視点が移っている。現場に立ち合っている私としても、その鮮やかな裏切りと自由さに心を打たれた瞬間でした。「ああ、スタジアムを撮影し始めたからといって、建築をテーマにした映像になる、なんて安易な予測をしていた自分が恥ずかしい!」という、むしろ清々しさすら感じたエピソードです。他にも、参加者の保護者の方から「我が子の見ている風景を少し覗けた気がしました」というコメントももらいました。現場に立ち合った経験から述べると、彼らは彼らなりに、結構はっきりした理由や根拠に基づき、撮影や編集をしています。もちろんその優先順位は、私たちが見慣れた映画やテレビのそれとは異なるものですが、決して奇を衒ったものではなく、その場その場で心の赴くままに撮影し、見たいように繋げていったのがこれらの作品なのです。

タイトルに含まれる「プリゼント present」という語には、あるがまま目の前にあるもの、という意味があります。目の前にあるものをあるがままに贈ったり、受け取ったりしながら、いろんな人たちがあるがままに生きられる社会が生まれる、そのきっかけになるなら、今回の活動の意義はより深まることでしょう。

---

1. 厚生労働省の令和3年度障害者芸術文化活動普及支援事業の一環として、高知県の NPO 法人脳損傷友の会高知青い空／中国・四国 Artbrut Support Center passerelle（パスレル）が主催となって実施されている事業です。

2. オーギュスト・リュミエールと、ルイ・リュミエール。シネマトグラフという映像撮影・投影が行える機材を開発し、1895年に初の商業的な映画興行を行った。撮影のために世界中を旅した彼らは日本にも立ち寄ったことがあり、その時撮影された映像は、日本最古の映像記録でもある。

3.「雨の散歩」という作品を制作した参加者。今回のワークショップに参加する前に、自分なりにどんな映像を撮れるか色々実験をして、準備万端の状態で参加してくれた。

会田大也
1976年生。ミュージアム・エデュケーター。東京造形大学、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 修了。2003年の開館時より11年間、山口情報芸術センター [YCAM] にて教育プログラムの開発運営を行う。ミュージアムにおけるメディアリテラシーや美術教育、企業との協働による教育プログラムの企画立案、地域での各種プロジェクト、また企業における人材開発といった分野で、ワークショップやファシリテーションの手法を用いて「学校の外の教育」を実践してきた。一連のオリジナルメディアワークショップにてキッズデザイン大賞、担当した企画展示「コロガル公園シリーズ」で、文化庁メディア芸術祭、グッドデザイン賞などを受賞。2014年 -2019年東京大学大学院 GCL 特任助教。あいちトリエンナーレ 2019／国際芸術祭「あいち2022」キュレーター（ラーニング）。2019年より山口情報芸術センター［YCAM］学芸普及課長。

厚生労働省 令和３年度障害者芸術文化活動普及支援事業

中国・四国ブロック 障害者芸術文化活動広域支援センター
『中国・四国 Artbrut Support Center passerelle』

センター長:岡村忠弘、プログラムオフィサー:津野雅人、
芸術文化活動支援コーディネーター（舞台、音楽）:北添紫光、
芸術文化活動支援コーディネーター（美術）:土谷 享

令和３年度 事業報告書『Passerelle Report』

発行：中国・四国 Artbrut Support Center passerelle
編集・デザイン：タケムラデザインアンドプランニング
イラスト：土谷 享
写真は各執筆者提供によるもの
座談会編集：岡村忠弘、平谷尚大
座談会協力：阪井悠華、妹尾恵依子、保田香織、髙橋 修、渉 秀之、西木 正、
松本志帆子、宮本祥恵、天野真紀子
執筆協力：会田大也
協力：あいサポート・アートセンター、
島根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねいろ、
愛媛県障がい者アートサポートセンター、徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、
広島県アートサポートセンター、藁工ミュージアム 分室、
香川みんなのアート活動センター KAGAWAMOVES
発行：2022年３月31日

NPO法人 脳損傷友の会高知 青い空／中国・四国 Artbrut Support Center passerelle
住所：高知県高知市塩屋崎町２丁目12-42　2F
TEL：088-803-4100　FAX：088-803-4420
E-mail：passerelle@blue-sky-kochi.com
https://asc-passerelle.com/